史上最強の恋姫

タバ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
史上最強の恋姫

【Ｎコード】
Ｎ１２９８Ｏ

【作者名】
タバ

【あらすじ】
ある日、裏社会科見学に出たケンイチは謎の白装束の男と出会う。謎の男の仕業によって、気がつくと彼は古代中国の三国志の時代にいた。そして関羽や張飛と名乗る美少女達と出会うのだった。

BATTLE1　ビギンズナイト（前書き）

処女作です。どうか生温かい目で見守ってください。

BATTLE1　ビギンズナイト

某県某所

とある深夜の美術館に

「はぁ～。どうして僕はこんな所にいるんだろう？」

1人の少年がいた。

彼の名は白浜兼一。元いじめられっ子であり、現在は武術を極めた達人達が集っている「梁山泊」の一番弟子すなわち史上最強の弟子である。

そんな彼が何故深夜の美術館なんかにいるかというと

「逆鬼師匠ったらいきなり裏社会科見学とか言ってこんなとこに（無理矢理）連れてくるんだもんな。」

師匠達による裏社会科見学によるものだった。

話は数日前に遡る。

「美術品の盗難だぁ？」

「ええ。」

ここは武術を極めた達人達が集う「梁山泊」。

今話しているのは、ケンカ１００段の異名を持つ空手家「逆鬼至緒」

である。そして今彼と話の向かいに座っているのが逆鬼の知り合いで刑事でもある本巻警部。
彼は警察では対処不可能な事件を梁山泊に依頼してくることがあり、今回もそのクチであった。
本巻警部の話によると、一週間前とある美術館で盗難事件が発生。さらに立て続けに2件同様の事件が起こった。ここまでなら只の盗難事件なのだが、警備員達が犯人に「蹴り殺されていた」ことが分かった。よって本巻警部はこの事件に闇人が関わっていると考え、梁山泊に依頼をしに来たのであった。

「ですが1つ妙な事がありまして・・・」

「と、いいますと?」
ここで今まで黙って話を聞いていた秋雨が口を開く。
彼の名は岬越寺秋雨、哲学する柔術家の異名を持つ柔術家である。
また、武術家であると同時にありとあらゆる芸術を極めた天才芸術家でもあった。

「警備員が殺された状況を考えると、犯人は闇人もしくはそれに与する者で間違い無いと思うのですが、盗まれた品が少々・・・」

「又、名刀とか武器の類か?」

「いえ。」
言いながら本巻警部は3枚の写真をポケットから取り出して

「これらがそれぞれの美術館から盗まれた品です。」

2人に見せた。

「何だこりゃ？」

「ふむ、これは銅鏡ですかな？」

3枚の写真には同じ様な形をした銅鏡がそれぞれ写っていた。

「はい。只の銅鏡です。」

「只の」の部分を強調する本巻警部。

「我々も最初は以前のような優れた武器を狙った闇人による犯行と考えましたが、盗まれた品が武器はおろか、美術的価値すらほとんど無い品ですから犯人の狙いがさっぱり読めんのです。」
ちなみに本巻警部が言っている以前とは闇の武器組が名刀である赤羽刀を狙った赤羽刀強奪事件のことである。

「成程。確かに妙ですな。」

「ああ。武器組の仕業じゃ無さそうだし、無手組がそんな価値の無い物を盗む筈が無いしな。」
考え込む2人。

「それで調べてみたところ、これと同じような型の銅鏡を展示してる美術館があと1か所ありまして、次に襲撃されるのはそこだと我々は踏んでいます。
そこで皆さんの力を借りたいと思ったわけです。」

「へっ、待ち伏せしてその盗人を捕まえるわけか。いいぜおやっさん。その依頼引き受けたぜ。」

「お願いします。これ以上無用な死者を出すわけにはいきません。」
頭を下げる本巻警部。

「どうする？兼一も一緒に裏社会科見学で連れていくか？」

「止めはせんが、今回は今までと違って相手の狙いがさっぱり読めないからな、十分に用心したまえ。」

そして現在に至る。

（それにしてもこんな深夜の美術館に1人ぼっちなんて、ちょっと怖いなぁ～）

現在、逆鬼は美術館の周囲、兼一は美術館の内部を警備という体制を敷いている。

ガシャン・・・

「！？」

兼一の耳に微かだがガラスの割れる音が聞こえる。

（まさかもう侵入されたのか！？逆鬼師匠の目を掻い潜って！？とにかく行かないと！！）

銅鏡の展示室に向かって走る兼一。

展示室に辿りついた兼一が見たのは、割れたガラスケースそしてその前に立つ白装束の男だった。男の手には銅鏡が握られていた。

兼一「お前！！そこで何してる！？」

？？？「おや？見つかってしまいましたか。」

謎の男は兼一に見つかっても意に介さない様子でいた。

？？？「まあいいでしょう。初めまして梁山泊の１番弟子、いや史上最強の弟子と言った方がいいかな？」

「なっ！？」

兼一は自分のこと知っている謎の男の言葉に動揺してしまう。

「君はＹＯＭＩか！？」

「いえ違いますよ。それにしても困りましたね。左慈がいないこんな時に限って・・・。やむを得ません、ここで捕まるわけにもいきませんしね。」

男は一呼吸置いて・・・

「あなたを外史へと送ってあげましょう。」

（ガイシ、何のことだ？）

兼一が男の言葉に戸惑っている隙に男は持っていた銅鏡を床に投げ捨てた。

ガシャァァァン！！

当然、銅鏡は大きな音を立ててわれた。

すると・・・

カッ！！！

割れた銅鏡が目も開けられない程の眩い光を発した。

「お前！？何をした！？」

手で目を覆いながら叫ぶ兼一。

「言ったでしょう？あなたを外史へと連れていくと。まあちょっとした実験も兼ねてるんですけどね。活人拳の弟子があの乱世の外史にどのような影響をもたらすか、という実験をね。」

男がそう言う間にも銅鏡の破片から出る光は強くなっていく。

「何だこの光・・・？まるで・・僕の意識を・・奪ってる・・？」

そして・・・

「ごきげんよう、史上最強の弟子。」

光が全てを覆った。

「兼一！！何があった！？」

異変に気付き展示室に飛び込んで来た逆鬼が見たのは床で割れてる銅鏡だけで、そこには誰もいなかった・・・。

BATTLE1　ビギンズナイト（後書き）

感想・批評待ってます。ケンイチ勢の時系列は沖縄編の前です。
次回からケンイチ視点で物語が進みます。

BATTLE2　外史（前書き）

多摩さん、光軍さん、操狂さん、指摘や感想ありがとうございます！言い忘れてましたが、恋姫の武将たちは一部を除き、弟子クラスの強さです。

BATTLE2　外史

あれ？

僕は何してたんだっけ？

逆鬼師匠に連れられて裏社会科見学に行ってた筈なのに・・・

そうだ！そこで白装束の変な奴に会って、そのまま妙な光に飲み込まれて・・・

僕はどうなったんだ？

「青空？」

気絶してた僕の目に最初に写ったのは一面の青い空、そして

「な、何で？」

見渡す限りの荒野。

おかしい。僕はさっきまで美術館にいたはずなのにいつの間にかこんな辺鄙な所まで移動している、どうやって？

師匠達の修行というわけでもなさそうだし・・・あっ！携帯で師匠達に連絡取ればいいんだ。そう思い、ポケットから携帯を取り出し、連絡を取ろうとするが、

「圏外・・・」

携帯の液晶には真っ赤な文字で圏外と書かれていた。

「さてこれからどうしようかな。」

ポケットに携帯を仕舞いながらそう考えていると

「おい、そこのお前。」

後ろから野太い声が聞こえた。

振り向くと頭に黄色い布を巻いて鎧を着込んだ3人の男達が立ってた。

「何だお前？随分変わった格好してんなぁ。」

あなた達も十分変です。そうは思ったが口には出さず、今一番の疑問を聞いてみることにした。

「あの～ここは何処でしょうか。」

「あん、てめえよそ者かよ。まあいいここは幽州啄県って所だ。」

幽州？啄県？どちらも聞いたことがない地名だ。

「そんでもって俺達が泣く子も黙る黄巾党ってわけだ。」

黄巾党・・・！！世界史の時間に聞いたことがあるぞ！確か古代中国の「黄巾の乱」に出てきた集団の筈だ。でも、どうして目の前にその人たちがいるんだ？

「へっ、そういうことだ。命が惜しかったら身ぐるみ置いてきな。」

ど、どうすればいいんだ！？こんなわけのわからない状況で、しかも只でさえ僕はこういう人たちが苦手なのに！（不良っぽいやつアレルギー）

目に見えて焦る僕を見て、気分を良くしたのかニヤニヤする男達。

だがその時

「待て！悪党共！！」

男達とは対照的な凛とした声がその場に響いた。

声のした方に目を向けると、とても可愛い女の子が立っていた。

黒髪を風にたなびかせ、年は大体僕と同じくらい。そして何よりも目を引くのが、美羽さんと同じぐらいのむ・・・って違う、違う。何よりも目を引いたのはその容姿に似つかわしくない青龍刀。でもまあ、僕の身近には常に日本刀を持った着物姿の師匠がいるからそんなには驚きはしなかったんだけど。

そんなことを考えていると、その女の子が男達に向かって口を開いた。

「とっとと立ち去るがいい下郎共！そこにいる御方は貴様らが気安く話しかけていい御方ではない！」

「「「何ぃ！？」」」

そう言われて怒る男達。まあ当然の反応だろうけど・・・

「ふざけんなこのアマ！俺達の恐ろしさたっぷり教えてやるぜ！」

「身ぐるみはいで楽しみましょうぜ、兄貴。」

「その後に売りとばせば一石三鳥ってか。」

下卑た笑いを浮かべる男達の言葉を聞いて、僕の心に沸々と怒りが沸いてきた。

この男達はこの子に何をするって言った！？

「ふざけるな！！！」

こんなわけのわからない状況だけど、この子をこんな奴らの思い通りにさせちゃいけないっていうのはわかる！！そう考えると、僕はいつの間にか叫んでいた。

そして僕は一番手近にいた男の首を両手で掴み、

「カウ・ロイ！！」

ひざ蹴りを叩きこんだ！

「「チビ！！？」

彼らが驚くのも無理はない。何せカモだと思っていた奴がいきなり叫んだかと思えば、今度は仲間の１人が速攻で沈められたのだから。そう、彼らに隙ができるのは仕方がなかった。

「劣化チャイキック！！」
アパチャイさんのキックを真似た蹴りを2人目の奴に放つ。
「てめぇ！よくも！！」
最後の1人が持っていた刀を振り下ろしてくるが、
「白刃流し！！」
内側にねじりきった拳で刃の側面を流し、そのままカウンターを叩きこむ！！
「君、大丈夫だった？」
全員を倒したことを確認すると、茫然とした表情のままの女の子に話しかける。
ちょっとショックが大きかったかなとか思っていると、
「何という強さ！さすがは天の御遣い様！！」
「へっ！？」
さっきとは打って変わって晴れやかな表情になった彼女はいきなり僕に向かってそんなことを言ってきた。天の御遣い？また変な単語が出てきたなぁ。
「あの～天の御遣いって？それに君は誰？」
「あっ！申し訳ありません。私としたことがつい・・・。あっ名前でしたな、私の名前は・・・」

「愛紗――――！」

自己紹介をしようとした女の子の声を別の子の声が遮った。

見ると、向こうの方から別の女の子が走ってきた。年はほのか（妹）と同じくらいなのだが、手にはその容姿には似つかわしくない蛇矛が握られていた。

「愛紗、このお兄ちゃんがひょっとして天の御遣いなの？」

「ああそうだぞ鈴々。何せ瞬く間に素手でこいつらを倒したのだから。」

「にゃーすごいのだ。」

そう言って僕が倒した男達を見る2人の女の子。って自己紹介が中断したままなんですけど・・・

「あのー名前の方は・・・」

「あっ！」

僕の言葉でようやく自己紹介が中断したままだということに気付いてくれたみたいだ。

「私の名は関羽。字は雲長です。」

「鈴々の名前は張飛なのだ。」

やっと名前が聞けた。ふむふむ関羽に張飛って・・・・・

「えええええええええええええええええええええええ！！！！！！！！？？？？？？？」

「「！！？？」

僕の驚きの叫びで思い切り2人を驚かせてしまったが、それよりもこの2人が関羽と趙飛ってどういうことだ！？そりゃ本物なら青龍刀や蛇矛持ってててもおかしくはないが、まさか僕はタイムスリップしてしまったじゃないんだろうか？いや、でも関羽も張飛も男の筈だし、あと考えられるのは・・・・・・・並行世界（パラレルワールド）しかないな。

「あのー御遣い様？」

「にゃー固まっちゃったのだ。」

いきなり固まった僕を心配して2人が声をかけてくるが、今僕が言わなきゃいけない言葉は只一つ。

「じ」

「「じ？」」

「ジェロニモ―！！！」

師匠に助けを呼ぶ彼に黄巾党を倒した時の勇ましさはこれっぽちも無かったという。

BATTLE2　外史（後書き）

はい、ケンイチに言わせたかった言葉ベスト3です。
更新は大体週一ペースでいく予定です。
それと、ケンイチ側からあと2人キャラを出す予定です（出番は当分先ですが・・・）。ヒントは「金髪」です。
それではまた次回。

BATTLE3　逃げない心（前書き）

気合いれて書いたつもりです。

BATTLE3　逃げない心

あれから何とか落ち着きを取り戻した僕はようやく互いの自己紹介を終え、今は幽州啄県という所に向かっている。その道中に「天の御遣い」とはどういう存在なのかを聞いた。

「私と鈴々は以前とある名だたる占い師から、いずれこの世界の大乱を鎮めるべく天の国より遣いが舞い降りる。その遣いは武器を持たず、己の拳のみでこの乱世を治めるだろう、というお告げを賜ったのです。そしてご主人様の先程の戦いぶりはまさしく天の御遣いのそれです！」

と、力説する愛紗さん。

ちなみに僕は彼女達のことをさっき教えてもらった真名で呼んでいる。なんでも、真名というものは神聖なものらしく、真名を許されていない者が真名を言った場合、斬り殺されてもしょうがないくらい失礼なことらしい、おっかないな・・・。

そして僕の「ご主人様」という呼び名についてだが、最初そう呼ばれた時はあまりにもむず痒かったので、普通に呼んでと頼んでみたら、

「ご主人様という呼び方が気に入らないのでしたら、兼一様というのはどうでしょう？」

はい、もっとむず痒いです。

それに、僕はまだ様付けされるほど何かしたわけでもないのだから。

結局、妥協案ということでご主人様に落ち着いた。
そんなやり取りをしてる内に町らしきものが見えてきた。

「随分と荒れてるね・・・」

「ええ、この町はこれまでに何度か黄巾党の略奪に遭っているようですから。」

それが町に着いてからの僕達の最初の感想だった。
家々は荒らされ、中には火をつけられて燃やされたと思われる家の焼け跡もあり、さらに至る所に血痕が残されていた。

「ともかく、早いところ鈴々と合流しましょう。」

鈴々ちゃんは僕達より先にこの町に来て、黄巾党に対抗するための兵力を集める手筈になっている。

「お兄ちゃーん！愛紗―！」
すると、僕達が探すよりも早く鈴々ちゃんがこちらにやってきた。

「鈴々ちゃん、大丈夫だった？」

「うん、大丈夫なのだ！」

と、元気に返してくれる鈴々ちゃん。どうやらこの様子だと黄巾党

はいまはこの町にはいないみたいだ。

「それよりも鈴々、町はどこにいるのだ？人っ子一人みあたらないのだが・・・」

愛紗さんがさっきから僕も思ってた疑問を鈴々ちゃんに聞いた。まさかとは思うが・・・

「生き残った人たちは今酒場の近くに集まってもらっているのだ。」

ほっ、どうやら皆殺しに遭ったわけではないらしい、良かった。

「ではご主人様早速その酒場とやらに行ってみましょう。」

ということで僕達3人は生き残っている人たちが集まっているという酒場に行くことにした。

鈴々ちゃんの言っていた酒場にたどりつくとそこには大勢の怪我人がおり、皆一様に悲痛な面持ちだった。

愛紗さんはというと、代表格らしき男性に自分達が乱世を鎮めるために立ち上がったこと、そして僕が天の御遣いだということを説明し、黄巾党からこの町を守るのに協力すると話していた。そういえば、結局天の御遣いは僕で確定なんだろうか？

すると、先程まで悲痛な面持ちだった人たちが愛紗さんの話（主に天の御遣いの部分）を聞いて、こう何というか・・・希望を取り戻したように見えた。

どうやら天の御遣いの噂は結構広まってるようで、さっきから僕は

尊敬の眼差しで見られている。うぅ・・・こういうのは慣れてないからな・・・。
おまけに・・・

「みんな！！もう大丈夫なのだ！！ここにいる天の御遣いのお兄ちゃんが何とかしてくれるのだ！！」

このように鈴々ちゃんが僕のことを物凄く僕のことを持ち上げるのだ。
ますますプレッシャーが・・・うぅ、吐きそう。

ともかく、町の人の話によると昨日黄巾党がこの町を襲った際、町の人たちに明日、つまり今日再びやって来ると宣言している。そしてこちらの用意できた戦力２０００人に対し、黄巾党側はざっと倍の４０００人はいるらしい。
だが、それよりも僕には考えなければならないことあった。そしてそれを考えるために１人誰にも気づかれることなく酒場を出た。

「ふぅ。やっと１人になれたよ。」

リラックスした口調で１人ごとを言ってみたが、兼一の心の中にある突っかかりは取れてなかった。その突っかかりとは、後数時間後に始まるだろう黄巾党との戦い、つまり戦争に活人拳を唱える梁山泊の１番弟子である自分が関わっていいものかというものであった。
戦争になれば敵味方関係無く否応なしに人が死ぬ。つまり、戦争に参加するということは直接的ではないにしても間接的に人を殺すことにつながってしまうのだ。兼一はそれを恐れていた。

師匠達がいれば、こういう時的確なアドバイスくれるんだろうけどなー。まぁ、いくら師匠達でも年齢的に考えて戦争に参加したことはないか。（長老はちょっと怪しいが）

「ご主人様、ここに居られましたか。」

不意に声をかけられ、振り向くと愛紗さんが立っていた。

「急に居なくならないでください。御身にもしものことがあったら・・・」

「あっ、ごめんなさい。」

どうやら余計な心配をかけてしまったらしい。

「えっと、それで何か用？」

「伝令からの報告を伝えに来ました。報告によると、黄巾党の軍勢はこの町に向かっており、行軍速度から判断してこの町に到達するのは2刻ほど後とのことです。」

2刻・・・えーと1刻が2時間だから、４時間か。

「報告は以上ですが、ご主人様の方こそよろしいのですか？」

「えっ、何が？」

「大変思いつめていた感じでしたが・・・」

うっ！鋭い、さすが武将。いや単に僕が隠し事下手なだけか？

そうだ愛紗さんに聞いてみよう。

「あの、愛紗さん」

「何でしょうか？」

「愛紗さんは戦争で人を殺すのに躊躇いとか無いの？」

「！！」

僕の質問を聞いて、物凄い戸惑った顔になる愛紗さん。さすがに直球すぎたか！？

愛紗さんは戸惑った顔から真剣な表情になり口を開いた。

「無いと言えば嘘になります。ですが私と鈴々はこれまでにこの町の人々のように略奪に苦しむ人々や圧政に虐げられる人たちを見てきました。そしてそういった人々を救うため、この乱世を鎮めようと立ち上がったのです。そのために人を斬ることや恨まれることもありましょうが、それでも私は決して逃げないと決めたのです。」

この時僕は気づいた。愛紗さんが理想を語る時の目があんなにも真っすぐなのはこの女性（ひと）にこのような「覚悟」があるからなんだ。愛紗さんが今言ったことを言葉にするのは簡単だ。でも愛紗さんの今の言葉は間違いなく「本物」だ。本当に覚悟があるからこそ言える言葉なんだ。

そして同時に僕には覚悟が無いことも気づいた。そう、人の死を受け止める覚悟が。

そうだ！あの時新島に言ったじゃないか！

———ボクは別にどこかを目指しているわけじゃない・・・ただ、

大切な人を守る力を身につけるまで、決して逃げ出さないだけだ。
――――
なのに今逃げてどうする！？この町の人たちを今守れるのは僕達しかいないのに！
戦争に関わることが間接的に人を殺すことにつながるとしても僕はその死を受け止めてみせる！！

「あのーご主人様？」

再び考え込んでしまった僕を心配して声をかけてくる愛紗さん。

「愛紗さん！！ありがとう！！」

「へっ？」

このタイミングでお礼を言われるとは思わなかったのか間抜けな声を返してしまう愛紗。

「僕はもう大丈夫です！！吹っ切れました！！」

「えーと」

愛紗としても返答に困っていた。さっきまで考え込んでいた奴がいきなり吹っ切れてお礼を言ってきたのだから、

「お、お役に立てて何よりです。」

こんな変な返事しか返せないのはしょうがなかった。

「愛紗――！！」

と、どうやら愛紗さん。探しに来たっぽい鈴々ちゃんの声が聞こえてきた。

「おーい鈴々こっちだ。」

「愛紗、お兄ちゃんはいたのかって・・・ごめん邪魔しちゃったのだ。」

なぜかUターンして戻ろうとする鈴々ちゃん。邪魔？何のことだろう？

「待て鈴々！！べっ、別にご主人様の相談を受けてただけで、やましいことは何もないぞ！！」

そして何故か赤面して鈴々ちゃんを追いかける愛紗さん。

相談かぁ、結局愛紗さんのことを一方的に聞いただけで終わってるんだよなぁ。何か申し訳ないな。

「お兄ちゃん、皆の準備が終わったから来てほしいのだ。」

どうやら町の人たちの戦支度が終わったらしい。

「じゃあ愛紗さん行こうか。」

「はい。」

そして今僕達の目の前には戦支度を終えた町の人たちが整列している。

「ではご主人様何か一言を。」

「はいっ？」

一言って何？

「皆の士気を上げるためにここはご主人様が何か言うべきです。」

「お兄ちゃん頑張ってなのだ。」

困った・・・こういうのはいつも新島の役目なのに、と思いつつもあまり時間をかけるわけにもいかないので1番皆に聞いてもらいたい言葉だけを言うことにした。

「えーと皆！あなた達の中にはきっと戦いや死ぬのが怖いと思っている人たちが居ると思う！でもこれだけは聞いてほしい。人間というのは大切な何かを守る時にこそ真の強さを発揮するものだと僕は信じてる！だから僕達は絶対に負けない！！！」

ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！！！！！！

どうやら皆の士気を上げることはできたらしい。愛紗さんと鈴々ちゃんも

「上出来ですご主人様！！」

「カッコよかったのだ！！」

と、ほめてくれた。

「ようし！全軍出撃するぞ！！」

ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！！！！

愛紗さんの号令の元再び怒号が響く。

黄巾党この町をお前達の好きにはさせない。そして僕はお前達からも、自分からも決して逃げない！！

ＢＡＴＴＬＥ３　逃げない心（後書き）

どうもタバです。本当は決着まで一気に書くつもりでしたが、ケンイチがすんなり戦争に参加するのはおかしいかな？と思い、ケンイチの「決心及び決意」を加えました（そのせいでだいぶ更新が遅れましたが・・・ｏｒｚ）。
感想・批評待ってます。

ＢＡＴＴＬＥ４　黄巾党との戦い（前書き）

更新が遅れてすみません！小テスト、レポート課題、サークル活動（イベントの準備）と、色々重なり中々時間がとれませんでした。

ＢＡＴＴＬＥ４　黄巾党との戦い

迫りくる黄巾党の数はこちらの倍の４０００。まともにぶつかってはこちらには勝ち目が全く無いので、作戦を立てることにした。
その作戦とは、一騎当千の実力を誇るであろう愛紗さん、鈴々ちゃん、あとついでに僕が先行して黄巾党に先制攻撃をかける。その後タイミングを見計らって後続の味方の軍勢が突撃するというものだ。
この時間差攻撃の目的はまず、最初の僕らの攻撃によって敵の士気を下げる。そしてそこに増援という追い打ちをかけ、士気が下がった敵をさらに混乱に陥れるというものだ。

この作戦の要は先制攻撃をかけるぼくら3人がどれだけ敵の士気を削げるかにかかっているといってもいい。もし敵の士気が下がってなかったら、増援が到着してもそのまま敵の数に圧倒されてしまうのだから。

「ご主人様。」

横にいた愛紗さんが話しかけてきた。

「どうしたの愛紗さん？」

「いえ、ここは私と鈴々に任せて後方で待機していても宜しかったのですよ。御身に万が一のことがあってはいけませんし・・・」

ああ、町を出てからから愛紗さんが僕の方をずっとチラチラ見てるなと思っていたが、あれは僕のことを心配してくれてたのか。

「大丈夫だよ愛紗さん。自分の身を守ることぐらいは出来るし、それに僕は女の子2人だけを戦場に行かせるような真似はしたくないんだ。」

「愛紗は心配しすぎなのだ。いくらお兄ちゃんが気になるからって。」

「ば、馬鹿者！変な事を言うな！！それに心配して何が悪い！？」

と、何故か顔を真っ赤にして愛紗さんが鈴々ちゃんに怒鳴る。

「愛紗さん、ホント大丈夫だから！鈴々ちゃんも茶化さない。」

とりあえず愛紗さんを落ち着かせてもう一度説得してみる。

「ご主人様がそういうのであれば・・・」

どうやら今度こそ納得してくれたみたいだ。

「お兄ちゃん！愛紗！見えてきたのだ！」

ホッとしたのも束の間、鈴々ちゃんの言った方向を見てみるとそこには聞いていた通り４０００人近い黄巾党の軍勢が進軍していた。

進行方向から考えて間違いなくあの町を目指しているのだろう。

「ご主人様、向こうはまだ我々に気づいていません。攻めるなら今が好機かと。」

愛紗さんが僕に進言してくる。

「よし！行こう！愛紗さん！鈴々ちゃん！」

「はい！」

「わかったのだ！！」

今僕がしていることは梁山泊の教えに反しているのかもしれない。
でも、理不尽な暴力に晒されている人たちを見過ごすことは僕には出来ない！！
そして僕らは黄巾党の集団に駆けて行った。

「靠撃！！」

まずは僕が突進技で集団に穴を空け、そこに愛紗さんと鈴々ちゃんが斬り込んでいく形で戦闘が始まった。

戦闘が始まって2，３０分が経過した。戦況は予想以上に僕らに傾いてきている。
というのも、どうやら黄巾党は数の暴力のみを頼りにした集団（言い方を変えれば烏合の衆）だったらしく、僕ら3人に仲間が次々と倒されたことで混乱と恐怖があっという間に広がりもはや統制というものが取れてないのだ。
もう1つは力量の差である。愛紗さんと鈴々ちゃんは三国志の武将に名を恥じない実力で次々と敵を斬り倒している。僕も最初は相手が持っている刀や槍にちょっとビビってしまったが、力任せにしか

武器を振るって来ない彼らの実力が、以前戦った武器組の雲泥の差だと解ると制空圏を築き間合いに入って来た敵を確実に倒している。

そして・・・・

ウオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！！！

戦場に黄巾党とは別の咆哮が響き渡る。どうやら後続の味方の軍勢が到着したみたいだ。

それを見た黄巾党はそのほとんどが戦意を喪失したようで、ほとんどの人たちが逃走もしくは武器を捨てて投降し始めた。それでもまだ戦おうとする往生際の悪い人たちは僕が気絶させる、もしくは味方の軍勢に討ち取られたみたいだ。

しかし・・・こうも圧倒的すぎるとまるで僕らが弱い者いじめしてるみたいだな・・・（実際は逆だけど）。

そして町に帰った僕を待っていたのは県令（市長みたいなものらしい）になって欲しいという町の人たちからの強いお願いだった。

「元々いた県令は最初の襲撃の時に俺達をほっといて逃げちまったんだ。」

「だから俺達を助けてくれたあんたらに頼みたいんだ。」

ということらしい。

「愛紗さん、どうする？」

「私はご主人様が引き受けるのが適任かと。」

「鈴々もそう思うのだ。」

えっ？僕なんかでいいの？

「えーじゃあ今日から僕がこの町の県令ということで。」

ワアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！

「！？」

あまりの歓声の大きさにビクッ！っとなってしまった。

というかそんなに喜ばれると逆に僕なんかでいいの？って不安になってしまう。

でも・・・数時間前とは打って変わって喜びに満ちた町の人たちを見ると、守れたんだなと思えてくる。

こうして今回の戦いは僕らの圧勝という形で幕を閉じた。

ＢＡＴＴＬＥ４　黄巾党との戦い（後書き）

これとは別に短編を掲載しました。よかったらそっちも読んでください。

ＢＡＴＴＬＥ５　龍と軍師（前編）（前書き）

すみません遅れてしまいました。感想で指摘されたあらすじの誤字を修正しておきました。

BATTLE5　龍と軍師（前編）

黄巾党の戦いに勝利してから数日が経過した。

僕は黄巾党の襲撃によって荒れ果てた畑の開墾を手伝っていた。何せ僕は元居た世界では園芸部に所属し、食べられる野草にすら精通するほど植物には詳しいのだ。今も簡単な肥料の作り方を教えているところだ。

もちろん農作業だけでなく県令としての仕事もこなしている。ただ、この世界では何故か言語は日本語なのに、文字は時代相応つまり中国語なのである。なので書類仕事をするときは情けないことにいつも愛紗さんに手伝ってもらっている。

「各地の黄巾党が集結し、巨大な勢力になりつつあります。――――」

ここはお城の中にある会議室。あの後農作業を切り上げた、今は僕、愛紗さん、鈴々ちゃんの3人で軍議をしている。もちろん議題は黄巾党についてだ。どうやら前回撃退した連中で全部じゃなかったらしい。

「――――県境では公孫賛という武将が黄巾党を食い止めているようです。そこで公孫賛と協力して黄巾党を討とうと思うのですがどう思われますか？」

「今の僕達の戦力じゃ黄巾党には対抗できないわけだし、愛紗さん

の言うとおりここはその公孫賛っていう人と協力すべきだと思う。」

「わかりました。では今すぐにでも公孫賛の下へ参りましょう」

というわけで僕達は公孫賛さんの下へ向かうのだが、やはり公孫賛も女の子になっていたりするのだろうか・・・？

「よく来たな、お前が噂の天の御遣いか。私がここの大将の公孫賛だ。」

僕達は軍を率いて公孫賛さんの下にやって来たんだけど、やっぱりというか予想通りというか、女の子になってましたか公孫賛さん・・・。

自己紹介の後、僕達が協力して黄巾党を倒すという提案すると、あっさりと了承してくれた。どうやら公孫賛さんの方も戦力が欲しい状況だったらしい。

「私の軍勢が５０００でそちらが２０００、合わせて７０００。それに対し敵がざっと１２０００。ちょっと厳しいかな。」

戦力差は約１．５倍でその差は５０００、これだけ敵の数が多いと前に僕達がやった突撃戦法は通じないな。

バン！！！

とか考えていると、いきなり部屋の扉が開いて公孫賛さんの部下らしき人が入って来た。何だろ？物凄く切羽詰まった感じなんだけど。

「何があったんだ！？」

「それが・・・」

部下らしき人は公孫賛さんに耳打ちするとそのまま出て行った。そして公孫賛さんが申し訳なさそうに口を開いた。

「すまん白浜。ちょっと面倒なことになった。食客として囲っている趙雲っていう奴がいるんだが、そいつが大層な自信家でな。ついさっき『いくら数が多かろうと所詮は烏合の衆！我が武の敵ではない！！』とか言って出て行ってしまったんだ・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「「「えーーーーーー！！！？」」」

僕と愛紗さんと鈴々ちゃんの声が響き渡った。

「馬鹿な！？いくら武に自信があるとはいえ、無謀すぎるではないか！？」

「すまん。まさか本当に実行するとは思わなかった。」

「お兄ちゃん、どうするのだ？」

趙雲か・・・確か五胡将軍の1人で関羽や張飛とともに劉備に仕えたっていう。いや、今はあまりそれは関係無いな。

「よし！愛紗さん、鈴々ちゃん。趙雲さんを助けに行こう。」

「正気ですか！？ご主人様！？」

「うん。たとえ無謀な人だとしても僕達と志が同じかもしれない人を見過ごすことは出来ないよ。それに今ならまだ連れ戻せるかもしれないから、そうすれば最悪の事態は避けれる筈だよ。」

「ですが、趙雲が既に戦っていた場合どうします？」

「だからその場合のことも想定して行動しよう。」

「・・・わかりました。では私と鈴々、それに少数の兵を連れて行きましょう」

「白浜、私達もいつでも出れるようにしておく。」

「ありがとうございます。公孫賛さん。」

公孫賛さんにお礼を言い、愛紗さんと鈴々ちゃんの方に向き直る。

そして、

「行こう！！皆！！」

ＢＡＴＴＬＥ５　龍と軍師（前編）（後書き）

長かったので２話にしました。次話でとりあえず黄巾党編は決着です。あの軍師も次の話にちゃんと出てきます。では感想・指摘待ってます。

BATTLE6　龍と軍師（後編）（前書き）

割と早めに仕上がりました。

BATTLE6　龍と軍師（後編）

たった1人で黄巾党の下に攻め込んだ趙雲さんを連れ戻すために僕と愛紗さんと鈴々ちゃん、それに少数の兵を連れて公孫賛さんの陣地を出たのはいいのだが、ここでまた新たな問題が発生した。行軍の途中、鈴々ちゃんが遠くの方に逃げ遅れている難民の人たちを発見したのだ。確かに言われた方向を見てみると、豆粒ほどの小さな人影が動いているのが分かる。しかし、あんな小さな人影を認識出来るなんて、鈴々ちゃん相当目が良いな。

「どうしますかご主人様？今あの者たちにかまえば、趙雲とやらに追い付くのは無理だと思いますが。」

「うーん。」

確かに愛紗さんの言うとおりあの人たちがいる方向と趙雲さんが向かったであろう方向とは外れている。でも全員で1つの方向に行く必要は無いわけで。

「じゃあ僕がひとっ走り行ってあの人たちを公孫賛さんの陣地まで連れていくから、その間に愛紗さんたちは趙雲さんの所に行って。」

「2手に分かれるのは構わないのですが、ひとっ走りとは・・・せめて馬に乗って行ってください。」

「大丈夫！馬より速いから。」

「は？」

梁山泊での過酷な修行で鍛えられた今の僕なら馬よりも速く走れるはずだ。現にトラックとはいえ、乗用車と互角に競争したのだから。

「うおおおお！！！ニトロ―！！」

岬越寺師匠が本気を出せと言ってくるときの合図を叫びながら走る。

「・・・・・・」

「ほ、ホントに馬より速いのだ・・・」

「ハッ、ハッ、ハッ。」

「おばあちゃん、頑張って下さい。もう少し離れないと黄巾党の戦いに巻き込まれてしまいます。」

「お嬢ちゃん、もうあたしは無理みたいだから、お嬢ちゃんだけでも先におゆき。」

「そんなこと言わないで下さい！！わたしは少しでも乱世で失われていく命を救うために塾を飛び出してきたんです。だから、もう少し頑張って下さい。」

「そうかい、ならもう少し頑張ってみるかな・・・ってお嬢ちゃん。前の方から物凄い速さで何か走って来たんだけど、ありゃ馬かね？」

「はわわ、違います。あれは人でしゅ。でも物凄く速いでしゅ。」

「大丈夫ですか！？」

言われた場所に着くと、そこには難民らしきお婆さんと金髪の女の子がいた。

「はわわわわわ・・・」

だが、２人とも（主に金髪の女の子）パニックになっているようで、どうやって落ち着いてもらおうかと考えていたら、

「お兄ちゃ――ん！」

後ろから聞きなれた声が聞こえた。

「お兄ちゃん、速すぎるのだ。」

やっぱりというか鈴々ちゃんが後方から兵士を連れてやって来た。

「鈴々ちゃん、どうしてここに？」

「愛紗が『ご主人様はああ言われたが、兵を連れていくより私１人が単独で行った方が速い、それにご主人様の脚力なら私に追い付くのも容易だろう。だから鈴々はご主人様の方に向かってくれ。』って。」

成程。確かに僕が直接この人たちを送っていくよりも兵士に任せた

方が効率的なんだろうな。

「じゃあ、鈴々ちゃんこの人たちをお願い。僕は愛紗さんの方に行くから。」

「あ、あの！」

「「？」」

さっき助けた金髪の女の子が話しかけてきた。何だろ？

「貴方様が噂の天の御遣いですか！？」

「え、そうだけど。」

「あのお願いがあります。私を貴方様の臣下に加えてくだしゃい！」

噛んじゃってるよ・・・

「私は自分の学問を少しでも人々の役に立てたくて、幽州に現れたという天の御遣いの噂を聞いてやってきました。」

「お兄ちゃん、どうするのだ？」

「うーん・・・」

どうしたものか。この子は鈴々ちゃんのように武に長けているわけでもなさそうだし。

かといって、ここまで必死に頼まれて無下にするのもなあ・・・

「あっ、申し遅れました！私は性は諸葛！名は亮！字は孔明です！」

「えぇっ！！？」

「はわわ！？」

驚いた僕の声に驚かせてしまったが、それよりも諸葛亮孔明といえば三国志でも名高いあの天才軍師がまさかこんな小さな女の子になってたなんて、千影ちゃんの例があるとはいえ驚きが大きいよ。

「あのー駄目でしょうか？」

「あのさ、こういう時君ならどうする？」

試すようで申し訳ないけど、今の状況を話してみることにした。

「ふっ、なかなか雄大な眺めだな。」

荒々とした荒野に青髪と黒髪の2人の女性が立っている。彼女らの眼前には何千、何万という黄巾党の兵達が目の前にいる敵に対して身構えている。

「のんきなことを言ってる場合か。全く1人で突撃とは無茶をする。」

「なぁに、名高き関羽に背中を預けられるのならこの程度の敵たい

したことはないさ。」

「ふっ、それは頼もしいな。」

「我が名は趙子龍！！一身これ刃なり！！」

「我が名は関羽！！白浜兼一が一の家臣！！我と思う者はかかって来い！！」

戦闘が始まり幾分か経ち、彼女たちの周りには無数の黄巾党の屍が転がっており、彼女達がどれほど勇猛か窺い知れる。
しかし同時にそれらの屍が彼女たちのハンデとなっていた。

「チッ、数ばかり多いな・・・」

「倒した敵で足場が悪くなっている、気をつけろ！」

「わかっている！って、しまっ・・・！」

「ハハハ！！捕まえたぞ！！！」

屍だと思っていた敵が突然、趙雲の足を掴む。どうやらこの黄巾兵死んだふりをしていたらしい。
そしてそのままバランスを崩してしまう趙雲。

「死ねー！！！」

そして別の黄巾兵がそれを好機として斬りかかって来る。

「趙雲！！」

関羽が叫ぶも、彼女の位置から趙雲を助けることは出来ない。しかし、

「靠撃！！」

嵐のように現れた『彼』なら彼女を救うことが出来る。

「靠撃！！」

鈴々ちゃん達と別れてから急いで行ってみると、既に戦闘が始まっており愛紗さんと青髪の女性がいた。多分この人が趙雲さんなんだろう。ちなみに趙雲さんを斬ろうとした黄巾兵は靠撃で吹き飛ばしておいた。

「愛紗さん、大丈夫！？で、そっちの人が趙雲さん？」

「ええ、何とか持ちこたえておりますご主人様。」

「ご主人様？ということはあなたが噂の天の御遣いか。察しの通り私が趙雲だ。」

やはりこの青髪の女性が趙雲さんだったみたいだ。それじゃ2人とも無事だったし、孔明ちゃん発案の作戦を実行するときだ。

「それじゃあ、愛紗さん、趙雲さん一旦引きます！」

「わかりました。」

「わかった。」

「ご主人様達が撤退しました。敵の先陣も続いて来ます！」

「よーし鈴々の出番なのだ！！」

「はい！ご主人様が退くのと同時に兵を展開して敵の先陣を半包囲します！その後は公孫賛軍と共に相手を挟撃して下さい！」

その後、後方からの公孫賛軍との挟撃が見事に決めてとなり、黄巾党との戦いは幕を閉じた。

「ご主人様、この子は？」

「えーと今日から仲間になる孔明ちゃん。」

「はわわ、よろしくお願いします。それと私のことは真名の朱里でかまいません。」

「じゃあ、よろしく朱里ちゃん。」

「はーっ、ご主人様ったら・・・。」

「愛紗さん、どうかした？」

「何でもありません！」

そっぽを向いてしまった愛紗さん、何か僕しました？

「にゃはは、愛紗がやきもちやいてるのだ。」

「やいてない！」

愛紗さんと鈴々ちゃんの漫才（？）を横目に見てると、趙雲さんが話しかけてきた。

「白浜殿。今日は助かった礼を言おう。」

「いや、そんな。それよりも趙雲さんはこれからどうするんですか？」

「そうだな・・・大陸を巡って仕えるべき英雄を探すつもりだ。それまではしばしお別れだ。」

「そうですか。じゃあまた会いましょう、趙雲さん。」

「ああ、さらばだ。白浜、関羽。」

この後、割と早く趙雲さんと再会することになるのだが、それは又後の話。

ＢＡＴＴＬＥ６　龍と軍師（後編）（後書き）

若干駆け足気味でしたかね。
次回は前にも言ってた他のケンイチキャラにスポットを当てた番外編との２話投稿になります。
それといつも感想を書いて下さる方、ありがとうございます。返信の代わりにここでお礼を言わせていただきます。

BATTLE7　誘いの罠（前書き）

ＭＯＶＩＥ大戦ＣＯＲＥとベリアル銀河帝国観てきました！！
ケンイチ・・・じゃなくてグレンファイヤーカッコ良かった！！
まあ、それは置いといて７話です。

BATTLE7　誘いの罠

「反董卓連合軍？」

黄巾党との戦いが終結した後、僕達の拠点である幽州に周辺の村や町から次々と傘下に加わりたいという申し出が殺到した。どうやらここで噂の天の御遣い効果が働いたらしい。その後、それらの村の管理・統治を行い、結果僕達の幽州は公孫賛さんの領地にも匹敵するぐらいの国力を手に入れた。ちなみにこの時僕もようやくこの世界の文字の読み書きが出来るようになったので、政治面において少しは頑張ったのだが、朱里ちゃんの活躍の足元にも及ばなかった。まあそれは置いといて、朱里ちゃんの説明によると漢王朝の皇帝であった霊帝が亡くなった後、後継者として皇位についた董卓という人物が都である洛陽で暴政を敷いているというので、諸候達による打倒董卓を掲げた反董卓連合軍が結成されることになったというわけだ。

「何を迷う必要がある！？民を苦しめる暴君など許しておくわけにはいかん！！何としても連合に参加すべきだ！！」

「鈴々も賛成なのだ！」

と、既にヤル気の愛紗さんと鈴々ちゃん。まあこの2人の性格からして反対することはなさそうだが、問題は2人と違ってあまり乗り気でなさそうな朱里ちゃん。

「あのご主人様、私としてはこの連合には参加すべきでないと思うんです。」

「何だと!?臆したか、朱里!?」

「はわわ、ち、違います。」

案の定というか物凄い剣幕で朱里ちゃんに迫る愛紗さん。マズイ、止めないと。

「愛紗さん落ち着いて!朱里ちゃんも何でそう思うのかちゃんと説明して。」

「はい、まず董卓に関して不自然な所が多すぎるんです。いままで洛陽には何度か斥候を出しているんですが、一度も戻って来ないんです。」

「消されたというのか?」

「はい。間違い無く。」

「えっ、でもそれってそんなに不自然なことなの?」

「私も最初は単に斥候の人たちが消されただけだと思ったんですが、旅人や行商人といった流通を担うような人達からも洛陽の情報は得られなかったんです。」

「えっと、それってつまり・・・」

「董卓に関する情報は連合軍からの通達のみなんです。都の、それも皇帝についての情報源がたった1つなんていうのは異常なんです。」

うーん。確かに朱里ちゃんの言うとおり不気味だ。

「もう1つは連合に参加する呉の孫権さんや魏の曹操さんに比べて私達の幽州はまだ発展途上です。この先大陸は群雄割拠の時代に突入すると思われるので、ここは国力を温存すべきだと思うんです。」

「確かに一理あるが・・・」

「どうするのだお兄ちゃん?」

どうするか・・・といっても僕の中ではもう答えは出ているのだけど。

「愛紗さん、鈴々ちゃん、朱里ちゃん。僕たちも反董卓連合に参加する!」

「ご主人様!?」

「ごめん朱里ちゃん。朱里ちゃんの言っていることも解るけど、でも!元々僕がこの拳を奮う理由は誰もが見て見ぬふりをする悪を片っ端からやっつけるためなんだ!!だから僕はどんな裏があるとしても、暴政に苦しむ人達を見捨てておけない!!」

「・・・解りました!私もご主人様についていきます!」

「じゃあ、決まりなのだ!」

この時、僕はこの連合軍への参加が思いもよらない再会に繋がるとはまだ知らなかった。

BATTLE7　誘いの罠（後書き）

今回の話はあくまでつなぎということで・・・
それとラストの文は伏線＆漫画版ぽく終わらせました。

BATTLE7．5　洛陽の鳥（前書き）

7話と同時投稿です。
前から言ってた他のケンイチキャラが登場します。

BATTLE7．5　洛陽の鳥

――洛陽――

洛陽の城にて3人の人物が集っていた。1人は眼鏡をかけた少女、賈駆。紫髪でサラシを胸に巻いた女性、張遼。そして気性の荒らそうな銀髪の女性、華雄であった。

「諸候達が私達を倒すため連合を組みつつあるようね。」

「今解っているだけでも魏の曹操、呉の孫権、おまけに冀州の袁紹かいな。こりゃ勝ち目薄いんとちゃうん？」

「ふん、所詮は寄せ集めの烏合の衆だろう。我が武の敵ではない。」

そう言って華雄は部屋から出ていく。

「あっ！ちょい待ち、華雄っち！」

「はあ、全くしょうがないわね。決戦の際には華雄には？水関を守ってもらうわ。あなたと呂布には虎牢関を頼むことになるわ。」

「それはええねんけど、――――はどうすんの？」

最近この洛陽にやって来た素性不明の1人の青年の名を聞き、賈駆の顔が若干歪む。

「あいつには月のそばに居てもらうわ。万が一の時には月だけでも連れて逃げてもらわないと。」

「そりゃ残念やな。――――は呂布っちと互角に戦えるぐらいの力持っとるのにな。」

「しょうがないでしょ。あいつは元々私達とは全く無関係なんだから。それにあいつらから月を守ってもらわないと。」

「あいつらか・・・、ホンマ何考えとるんやろな。」

「いくら考えたって解らないわ。それより私は月の所に行くから、呂布に今日の軍議の内容伝えといて。」

「おう、わかったで。」

「月居る？入るわよ。」

賈駆はこの城で最も地位が高い人物が居るであろう部屋に入って行く。とは言っても、その人物は彼女の大事な友人でもあるのだが。

「あっ、詠ちゃん。」

「よっ、詠。」

「って、何であんたまで居るのよ？」

室内には賈駆と同じくらいの年齢の少女と顔にフェイスペイントをいれた青年がいた。

賈駆は先程の軍議で決まったことを月に話した。
月にこれからのことを話している間も賈駆は憤りを感じていた、理不尽な要求を強いてくるあいつら、そして無力な自分達に。
だから彼女は託すことにした、目の前の青年に希望を。

青年は月の不遇な状況にかっての自分を重ね合わせていた。そして決心した、彼女を絶対に守る、と。

（籠の鳥のまま死ぬのは俺だけで充分だよな。）

「月のこと、頼んだわよ。翔。」

そして青年は希望を託された。

スパルナ（美しき翼を持つ者）と呼ばれた男がそこにいた。

ＢＡＴＴＬＥ７．５　洛陽の鳥（後書き）

はい、というわけで叶翔です。予想出来た方は少なかったと思います。
まあ、董卓サイドならこいつしかいねえ！！という感じで決めました。
次話で残った１人を出す予定です。
それと、期末試験が近いので１月末まで更新がストップしてしまいますが、ご容赦下さい。
では感想・批評待ってます。

ＢＡＴＴＬＥ８　反董卓連合軍（前書き）

今年最初の更新です。それとＰＶがいつの間にか４万５０００越えてました。
読んで下さる皆様ありがとうございます。

BATTLE8　反董卓連合軍

反董卓連合に参加することに決めた僕達は現在、連合の陣地に来ていた。ちなみに僕達の肩書は幽州啄県代表の「白浜軍」・・・・・・・何度聞いても恥ずかしいな、この名前。
当初は史実通り「蜀」という名前にしようとしたのだが、愛紗さんや朱里ちゃんに強く薦められる形でこうなった。
「じゃあ、僕と朱里ちゃんで軍議に出てくるから。」
「では、行ってきます。」

「おー！白浜じゃないか！久しぶりだな。」
連合軍の軍議が行われるテントに入ると、見知った顔がいた。以前一緒に黄巾党と戦った公孫賛さんだ。
「お久しぶりです。公孫賛さん。」
「あーら伯珪さん、貴方『天の御遣い』なんて胡散臭い人とお友達なんですの？門地の低い者同士仲良しなんですのね。」
公孫賛さんと話してると、横から声が掛かり、見てみるとそこには時代的に、いや現代でもお目に掛かれないような金髪ロールをした女性がいた。
「相変わらず名家を鼻にかける奴だな。」
「あーら、袁家は鼻にかけなくても名家ですのよ。」

（ご主人様、あの人が袁紹さんです。）
と、僕が誰だか解らないでいると、朱里ちゃんがそっと耳打ちしてくれた。

「全くうるさいおばさんね、死んじゃう？」

「出ましたわね、クルクル小娘っ！」

僕らに続いてテントに（袁紹さん程大きくない）金髪ロールの女の子が入って来た。そして袁紹さんにいきなりケンカを売った。

（あの人が魏の曹操さんです。太守であると同時に優れた武人でもあるそうです。）

さすがに曹操が女の子になっているということには驚かないが、確かに朱里ちゃんの説明通り、あの子も強いというのが立ち振る舞いから解る。
そして曹操さんや袁紹さんに気を取られて気付かなかったが、テントには公孫賛さんの他にも褐色の女の子とその後ろに眼鏡をかけた黒髪ロングの女性がいた。

（あの人が呉の王・孫権さんと軍師の周瑜さんです。孫権さんは先王だったお姉さんが亡くなって即位したと聞いています。）

成程。今ここには史実通り三国志の主要人物が揃っているわけか。

「さて、わたくしの下にこうして集まって頂いたのは他でもない董

卓さんのことですわ。」

あの後、言い争いを続ける曹操さんと袁紹さんを公孫賛さんが止め、軍議が始まった。

「朝廷で暴虐の限りを尽くす田舎者を懲らしめるため、この連合に最も必要なものは何でしょう？」

袁紹さん主体で軍議が進むのだが、袁紹さんの言葉を聞いてると、嫌な予感しかしないのは何故だろう。

「それは強く美しく門地の高い、三国一の名家出身の統率者ですわ！！そう！まさしくこのわたくしのことですわ！！」

「「「・・・・・・」」」

「早速そんなオチか・・・」

嫌な予感が的中したよ。見ると曹操さんや孫権さんも僕と同じように絶句してる。

「あら、意見はありませんの？なら満場一致でこの袁本初がこの連合の指揮を執りますわね！」

「はっ、勝手にすれば。」

「意義は無い、だが我々も勝手にさせてもらおう。」

そう言って曹操さんと孫権さんは出て行った。

「朱里ちゃん。大丈夫なの、この連合？」

「仕方ありませんよ、どの諸候さん達も自分の利益が最優先で、諸候同士で協力するなんていう考えの人はほとんどいませんから。」

うーん、さっきのグダグダな軍議がこの連合の縮図というわけか・・・

「何ですか！！その体たらくは！？」

軍議の後、拠点に戻り、軍議の内容を話したら案の定、あまりの内容の軍議に愛紗さんが怒った。

「袁紹は馬鹿なのだ。」

「方針が何も決まりませんでしたからね・・・弱小軍である私達にとっては方針があった方が何らかの策を立てれるのですが・・・」

と、これからの方針について悩んでいると、

「失礼するっ！！！」

外の方から女性の声が聞こえてきた。

「我が主、曹猛徳が関将軍に用があって参った！関将軍は何処か！」
外に出てみると、そこにはさっき軍議で一緒だった曹操さんと武官らしき2人の女性が立っていた。
「いきなり乱入して人を呼びつけるなど無礼であろう！！」
「何だと貴様！この御方が誰か解っているのか！！？」
不味い。只でさえ、愛紗さん気が立っていたのに、いつの間にか青龍偃月刀を構え、同じく獲物を構えた曹操さんの側近の女性と対峙している。
「愛紗さん、駄目だ！」
「春蘭、やめなさい。」
「くっ・・・解りましたご主人様。」
「はっ、華琳様。」
ホッ、何とか踏みとどまってくれた。というかこの側近の人、物凄く切り替わり速いな。
「曹操さん、僕達に何の用です？」
「あなたに用はないわ。あるのわこっち。」
と言って愛紗さんの方を指さす。

「初めましてね関羽。私の名前は曹猛徳。単刀直入に言うわ。あなた私の者になりなさい。」

「「！？」」

「その美しい黒髪に、青龍偃月刀を軽々と操る武の才、そして理想に殉ずるその姿。どれをとってもこんな弱小軍に置いておくのは勿体ないわ。私の治める魏に来れば優秀な人材と潤沢な軍資金であなたの理想を実現させてあげるわ。」

「・・・・・・」

「どう？悪い話しではないと思うのだけれど。」

「ふざけるな！！！」

「！？」

「私はご主人様について行くと決めたのだ！！たとえどんな困難があろうとも、貴様の力を借りる気は無い！！」

「貴様！華琳様に向かって何という口の・・・『春蘭、下がりなさい。』」

「しかし・・・」

「同じことを2度言わせる気？春蘭。」

「・・・はっ」

「ふーん。」

すると曹操さんは今度は僕の方を値踏みするような眼で見てきた。

「こんな弱っちそうな男の何処がいいのかしら？」

グサッ！！！

「何を言うか！ご主人様は戦いになれば打って変わって凛々しくなるのだぞ！！」

もういっちょグサッ！！！

「そうなのだ！お兄ちゃんは見かけと違ってとても強いのだ！！」

とどめのグサッ！！！

「はわわ、愛紗さん、鈴々ちゃん、ご主人様が真っ白になっちゃいました！」

「はっ！よくもご主人様を！！」

「いや、半分以上はあなたたちのせいでなくて？」

僕ってそんなに見た目頼りないのかなぁ・・・？

「まあいいわ今日の所は退くわ。春蘭、秋蘭帰るわよ。」

「「はっ！」」

って、へこんでる場合じゃない、これだけは言っておかないと・・・

！

「曹操さん！」

「何かしら？」

「ここにいる皆は僕の大切な仲間なんです！だからあなたが何度来ても誰も渡しません！」

「覚えておくわ。でも、私は一度欲しいと思ったモノは必ず手に入れるわ。せいぜい覚悟しておきなさい。」

そう言い残して曹操さん達は帰って行った。

「関羽の引き抜きは失敗したのか？」

「まあね、でもあきらめたわけじゃないわ。必ず手に入れてみせるわ。」

ここは反董卓連合の魏に充てられた陣地である。そこで2人の男女が会話していた。1人は曹猛徳。そしてもう1人は彼女と同じく金髪で「黒装束」とも言えるような格好をしている青年だった。

「それよりあなたこそ良かったの？あの白浜とかいう天の御遣い、あなたの仲間なんでしょ。」

「誰が仲間だ。俺とあいつは今は敵同士だ。」

「ふーん。でもその割に随分好意的に評価してるように思えたんだけど？」

「知らん！」

青年は何が恥ずかしかったのか少し不貞腐れて部屋を出て行った。

「ご主人様、先程の大切な仲間だと言ってもらったこと、とても嬉しかったです。」

「えっ、そんなの当たり前ですよ。」

「いえ、ご主人様はやはり人の上に立つ御方です。この乱世で部下をモノとしてではなく人として見るということはとても難しいのです。」

まあ、僕は新島みたいに人をコマとして扱うのが嫌なだけなんだけどね。

「えーと、つまり私が言いたいのはこのままのご主人様であって欲しいということです。では。」

そう言って愛紗さんは向こうの方へ去って行った。

ＢＡＴＴＬＥ８　反董卓連合軍（後書き）

えーとりあえずあいつの登場です。まあバレバレですね。でも一応まだ名前は出しません。

それとしばらく実家に帰省しますので次の更新が３月ぐらいになるかもしれません。ネット環境が全く揃ってないんです。ホントすみません。

ＢＡＴＴＬＥ９　ケンイチＶＳ華雄（前書き）

ついに実家でもネットが出来るようになりました。というわけで早速投下します。
それとＰＶが５万５千越えてました。
これも皆様のおかげです。

BATTLE9　ケンイチVS華雄

「おーい、ちょっといいかな？」

曹操さんが立ち去ってからちょっとした後、今度は栗色の髪のポニーテールの女の子が僕たちの陣地にやって来た。

「お主は誰だ？どうして我が軍の陣地に居る？」

さっきの曹操さんのことがあって、女性に対してかなり警戒している愛紗さん。今にも胸倉つかみそうな勢いだ。

「愛紗さん、待って。警戒するのは解るけど、少しは落ち着いて下さい。」

「うっ・・・すみません。」

「何かあったのか？」

「何でもないのだ！それよりお前誰なのだ？」

「あたしか？あたしは馬超ってんだ。よろしくな。」

「よろしくなのだ。」

お互いに挨拶を交わす馬超さんと鈴々ちゃん。そういえばどことなくこの２人雰囲気が似てるな。

「確か西涼の領主、馬騰さんの娘に同じ名前の人が居たような気が

しますね。」

「そりゃあたしのことだ。馬騰はあたしの父上さ。」

「ほう。ではあなたがあの名高き錦馬超か。」

「貴方なんて言い方はやめてくれよ。何だか体中が痒くなってくる。馬超って呼んでくれよ。」

「わかったなら私もそう呼ばせてもらおう。私は関羽。」

「鈴々は張飛なのだ。」

「私は諸葛亮、字は孔明です。よろしくです。」

順々に自己紹介していく愛紗さん達。そして馬超さんの視線が僕に向いた。

「えっと、んでもってあんたが天の御遣いの・・・・・・」

「はい。白浜兼一です。」

「ふーん。結構地味っぽいな。」

うっ、さっきの傷が・・・

「そんなことは無い、ご主人様は私達と同じくらい強い。それに武だけでなく人の上に立つ強さというものをお持ちになってる。」

又僕が曹操さんの時みたくならないよう、すかさず愛紗さんがフォ

ローに入る。

「そういえば馬超さんはどうしてここに？」

「ああ、袁紹からの伝令が来てさ。配置を伝えに来たんだ。」

「配置？ということはそろそろ攻撃開始か？」

「ああ、白浜軍は後曲だってさ。」

まあ、僕たちの軍の規模を考えれば、後方というのは妥当だろう。下手に最前線に送られたりしたらひとたまりもないからな。

「むぅ・・・我が軍の兵は前線でも問題ないというのに・・・」

愛紗さんにとってはこの配置は不満みたいだ。

「後曲には後曲の戦いがありますので、そんなに気にすることは無いと思いますよ愛紗さん。」

朱里ちゃんが愛紗さんをなだめる。

「そういえば馬超はどこに配置されたのだ？」

「ん？あたしか、あたしは父上と一緒に左曲に配置されてるんだ。」

「そっかー、一緒に戦えなくて残念なのだ。」

と、鈴々ちゃんがぼやく。どうやら鈴々ちゃんは馬超さんのことを気にいったみたいだ。

「そう言うなって。ま、後曲からあたしの戦いぶりを見ててくれ。」

「じゃあ、気をつけてね馬超さん。」

「ああ、じゃあな。」

そう言って馬超さんは陣地を出て行った。
この連合にも袁紹さんや曹操さんと違って、こう、何というか普通に良い人も居るんだなぁ。

「まず前曲を前へ、馬騰さんたち左曲と伯佳さんたち右曲も同時に前進を！」

「あのー姫、それって後曲以外前進ってことですか？」

「そうですわ！さあ？水関を突破しますわよ！！」

「ねえ愛紗さん。」

「・・・はい。」

「僕達後曲で良かったね。」

「ええ・・・」

「要塞に無策のまま突っ込むなんて愚策中の愚策ですよ・・・」

?水関を連合軍が攻撃し始めて数時間が経過したが、大将である袁紹さんが只の力押しで要塞である?水関を突破しようとしているもんだから、前線がとんでもないことになっている。

愛紗さんと朱里ちゃんも呆れている。

公孫賛さんと馬超さんだいじょうぶかなぁ・・・

「ちょっと文醜さん!顔良さん!?水関はまだ突破できませんの!?」

ここは後曲、袁紹軍の拠点である。大将でもある袁紹が2人の部下に文句を言っている。

一人は黒髪のおかっぱ頭の少女、顔良。もう一人は水色の髪の少女、文醜である。

「姫―少しは落ち着けって。そんな簡単に突破出来たら要塞の意味ないじゃん。」

「魏軍と呉軍が大攻勢を仕掛けてますからもう少しだと思いますけど・・・」

「何を言ってますの！この広大な心をもってしてもあと一時間しか持てませんわ！！こうなったらさらに軍を投入して力押ししかありませんわ！」

「で、でも只でさえ前線は大混乱なのにますます混乱するんじゃ・・・」

袁紹の無茶な命令に戸惑う顔良。どうやら彼女は主と違ってそれなりに思慮深いようだ。

「知ったことではありませんわ！とにかく城門を突破するのです！！」

「えっ、魏呉両軍の援後のため白浜軍も前線へ・・・ですか？でも、乱戦の中でそんなことしたら余計危険な気がするんですが・・・」

「でも袁紹様の命令なの・・よろしくね。」

後曲にいた僕達に袁紹さんからの伝令が来て、伝令を伝えに来た顔良さんによると僕達も前線に行けということらしい。

「我が軍まで前線に！？」

「今さら援軍なんていらないと思うのだ。」

「しかし、弱小軍である私達に総大将の命令は絶対です。混乱を広げない程度にするしかないですね・・・」

「ごめんなさい皆、僕が不甲斐ないせいで皆に迷惑かけて・・・」

「お兄ちゃんは悪く無いのだ！袁紹が馬鹿だからいけないのだ！！」

「そうです、鈴々の言うとおりです！とりあえずここは朱里の案に従いましょう。」

「前線では我が軍が随分苦戦してるようね・・・」

「抵抗が激しくて思うように攻めることが出来ないようです。」

ここは曹操軍の陣地。曹操が部下である夏候惇からの報告を聞いて、苦い顔をしている。

「あのお馬鹿のおかげで私の可愛い兵を無駄に損ずるわ。桂花何か策は？」

曹操に呼ばれ、頭に猫耳を模したような頭巾をつけた少女が出てくる。この少女が魏の軍師、荀？である。

「甲羅に首を引っ込めた亀を殺すには餌が必要です。幸いにして白浜軍が動き出しています。我が軍はこれを利用し、白浜軍の前進に合わせ素早く後退してはどうでしょうか。」

「何っ！？先陣を譲るというのか！？」

「無形の誉れよりも実益を取るわ。白浜軍に敵将を排除させて、その機を逃さず城門を突破するの。」

「あの男を囮にするの？面白いじゃない。」

「孫権殿！！曹操の軍勢が後退していきます！」

ここは呉軍の陣地。今王である孫権と軍師である周瑜が控えている。そして部下である武将・甘寧から魏軍後退の報告を受ける。

「恐らく白浜軍を囮にして敵軍をおびき出す策かと。我々はどうします？」

「よし、では我が軍も兵を下げろ。」

そのまま後退の指示を出す孫権。

「うわっ、かなり凄いことになってるな・・・」

袁紹さんの命令通り前線に出てみると、魏軍・呉軍共に苦戦しており、戦場は混戦状態と化していた。

「って、あれ？」

「どうしましたご主人様？」

「いや何か急に静かになったような・・・？」

さっきまで聞こえていた周りの咆哮や喧騒が急に半分くらいの大きさになってしまった。

「はわわ！大変でしゅ、ご主人様！！魏軍・呉軍共に後退して行きます！！」

「ええっ！！？」

いつの間にか静かになったと思ったら、周りからは魏軍・呉軍がきれいに消え、後退していた。

「お兄ちゃん！城門から敵が出て来たよ！！」

そしてさらに悪いことに鈴々ちゃんから敵の増援の報せがくる。

「いけない！私達敵を誘い出す囮として押し出されちゃったんです！！」

マズイ、ということは今最前線にいるのは僕達だけだから、狙い撃ちされちゃう・・・！

「くっ・・・僕が殿をするから、朱里ちゃんと愛紗さんは皆を後退させて！！」

「いけません！！一人で行くなど！！」

「でも急がないと・・・！このままじゃ敵に殲滅されてしまいます！！」

「なら私もお供します。鈴々、朱里、兵の後退の指揮を頼む。」

「よし！行こう！！」

「フン、連合軍などこの程度か。」

「待て！！」

「！？」

「これ以上我が軍の兵士を傷つけるのは許さん！！これより先はこの関羽と天の御遣いである我がご主人様が相手だ！！」

城門から出てきた敵軍と対峙すると、そこには大勢の董卓軍の兵士と指揮官らしき戦斧を構えた銀髪の女性がいた。

「ほう、貴様が噂の天の御遣いか。ならどれほどのものか試させてもらうぞ！！」

銀髪の女性は獲物を見つけたような笑みを浮かべると、一気に接近してきた。

「我が名は華雄！！我が戦斧の一撃受けてみよ！！！」

僕に向かって振り下ろされた斧に対して両手の手甲を交差させ、衝撃に耐えられるよう、下半身に力を込める。

金属と金属のぶつかりあう甲高い音が周りに響く。

それなりに重い一撃だったけど、耐えられない攻撃じゃない・・・！

「やるな！だが、まだまだ！」

そう言って華雄さんは斧を引き、今度は横薙ぎに振るってくる。

それをバックステップでかわし、距離を取る。

「逃がさん！！」

距離を詰めた華雄さんの逆袈裟の一撃を右の手甲で受け流す。

「どうした！？手も足も出さんとは、臆したか！？」

これまで一切反撃しなかったことを疑問に思って華雄さんが訊いてきた。

でも、どうしよう。今までの経験からして、この質問に答えると、余計な怒りを買いそうな気が・・・

「あのですね・・・」

「？」

「僕は・・・・・・女性には絶対手をあげない主義なんです！！！」

この後、関羽は語る。ご主人様の一言で戦場が凍った、と。

どうしよう、意を決して言ったが、華雄さんが凍ったと思ったら、段々プルプルと震えてる・・・

「貴様・・・・・・！！こんな愚弄受けたことがないぞ！！許さん・・・許さん・・・許さん！！！」

ヒィーーー！！やっぱり、というかなんかデジャブが・・・

「死ねーーー！！！」

突進してきた華雄さんの突きをサイドステップでかわす。

そのまま繰り出された袈裟斬り、右斬り上げをそれぞれ左右にかわす。

というか攻撃が怒り任せになったせいで、さっきより格段に甘くなってる。

振り下ろされた斧をサイドステップでかわすが、今度は距離を取らず、そのまま斧の柄を両手で押さえこむ。

「くっ、離せ・・・！」

華雄さんが斧を取り返そうとするがビクともしない。だが、ここで

斧を持つ両手の力を緩める。

「うわっ！？」

すると当然華雄さんは後ろにバランスを崩す。
その隙を逃さず、接近して華雄さんの右腕の間接を柔術で極める。

「グッ！？」

「間接は極めました。もう降参して下さい。」

「どこまで私を愚弄さる気か！！？生半可な情けなどいらん！！殺すならさっさと殺せ！！」

「それは違います！！」

「！？」

「あなたに武人としての誇りがあるように、僕にも信念があります！！それは絶対に曲げたくないんです！！」

「・・・・・・わかった。なら今は敗者として勝者に従おう。捕虜のでも何でも好きにするがいい。」

こうして華雄さんは僕達白浜軍の捕虜となってくれた。

「ご主人様、ご無事でしたか？」

華雄さんを僕達の陣地に連れて行ってもらった後、愛紗さんも無事だったようで、僕に駆け寄ってきてくれた。

「愛紗さんの方こそ大丈夫でしたか？」

「ええ、将である華雄が敗れたため、敵兵の勢いが一気に弱まったので何とかなりました。それとご主人様に言っておかなければならないことがあります。」

「えっと、何でしょう？」

「女性と戦えないのでしたら最初からそう仰って下さい！！何のために私がいると思ってるんですか！？」

「えっと・・・・・ごめんなさい。」

と、愛紗さんに怒られていると、突然轟音が響いた。

見ると、？水関の城門が破られたようだ。

「兵を率いる将もいなくなったので砦の中の制圧も時間の問題でしょう。」

？水関の方を見て呟く愛紗さん。

こうして？水関の戦いは連合軍の勝利という形で幕を閉じた。

ＢＡＴＴＬＥ９　ケンイチＶＳ華雄（後書き）

まあサブタイトルがちょっとネタバレ気味でしたが、どうでしょうか？
初めてまともな戦闘描写を書いた気がします。
それとＢＡＴＴＬＥ１～８までちょっぴり修正しました。
では感想・批評待ってます。

ＢＡＴＴＬＥ１０　前門の虎、後門の狼（前書き）

特に書くことはありませんが１０話です。

ＢＡＴＴＬＥ１０　前門の虎、後門の狼

「しつこいな、何度聞かれても、喋ることは無い。」

「お前は敗者としてご主人様に従うのではなかったのか？」

「それとこれとは話が別だ。」

？水関戦の後、捕虜になった華雄さんから少しでも謎に包まれた董卓のことを訊こうとしたのだが、この通り何も話してくれない。

「それよりもご主人様、そろそろ軍議の時間では？」

「あっ、そういえばそうだね。じゃあ行ってきます。」

結局華雄さんからは何も情報が引き出せないまま軍議の時間となった。

「ホーホッホッホッホ！！先の？水関戦ではこの私の策通りことが進みましたわね！！これで私の有能さは証明されましたわ！」

まあ、予想通りというか軍議はいきなり袁紹さんの自慢で始まった。出席している孫権さんや公孫賛さんも、もはや何も言うまいという感じだ。

只一人曹操さんを除いて。

「フン、何が有能よ。あなたの愚策のせいで私の可愛い兵達がどれだけの損害を受けたと思ってるの。」

「愚策ですって！？そんなの単にあなたの兵隊が無能なだけでなくて？」

「私の兵が無能ですって？面白いこと言ってくれるじゃないこのオバサン。」

「誰がオバサンですって！？このクルクル小娘！！」

さっきの戦いでかなりの損害を受けた曹操さんは袁紹さんに対してかなりご立腹である。
そして袁紹さんも自分が無能呼ばわりされて怒っている。

「二人とも！その辺にしとけよ。今は虎牢関を攻める策を立てなきゃいけない時なんだぞ！」

ここですかさず公孫賛さんが止めにはいる。もはやこのパターン定番と化してきたなあ・・・

「あら、そうでしたわね。私としたことが曹操さんなんかの口車に乗ってしまって・・・まあ、ここは伯佳さんの不細工な顔を立ててあげますわ。」

「不細工は余計だっての。」

「いいでしょう。では私が考えた虎牢関攻略の策を発表しましょう。」

と言って一呼吸置く袁紹さん。とは言っても、又？水関の時みたく只の突撃になりそうな気が・・・

「私が考えた策・・・それは白浜軍にあり！ですわ！」

へっ・・・僕達が何だって？

「聞けば先の戦いで敵の将軍・華雄を討ち取ったのはあなた達白浜軍なのでしょう？なら次の戦いもあなた達が敵の将軍の張遼と呂布を討ち取れば敵は総崩れですわ！！そうなればもう勝ったも同然ですわ！！」

ちなみに華雄さんは捕虜にしたということでなく、討ち取ったことになっている。これは華雄さんから情報を聞き出すことで、兵力で劣る僕達が少しでも他の陣営より有利に立とうという朱里ちゃんのアイデアだ。

いや、今はそれよりもこっちの方が重要だ。つまり袁紹さんが言うには僕達に最前線に行け、と？そんな無茶な！？

「それは素晴らしい愚策ね。」

「そうでしょう・・・って！愚策ではありませんわ！！」

「・・・悪いが我が軍は後方に移らせてもらう」

「ちょっと孫権さん！？勝手な事をされては困りますわ！」

言い争いをしてる曹操さんと袁紹さんを尻目に孫権さんはそう告げると、そのまま席から立ち、制止する袁紹さんを無視してテントを

出て行った。
そして孫権さんを皮切りに曹操さんや他の諸候も出て行き、テントの中にいるのは僕と公孫賛さんと袁紹さんのみとなった。

「それじゃ僕も失礼しま・・・」

「ちょっと待ちなさい！！白浜さん！！」

僕も出て行こうとしたが、袁紹さんに呼び止められる。しまった・・・タイミングを逃した。

「あなたの軍には最前線を務めてもらわないといけませんのよ。そこのところ解ってますの！？」

「いや、袁紹さん。いくらなんでも僕達の兵力じゃ、最前線に出ても全滅するだけです！」

「そうだよ袁紹。いくら白浜のところに関羽達がいるからって、多勢に無勢だよ。」

「そんなこと聞いてませんわ！！やるんですの！？やらないのですの！？」

どうやってこの人を説得すればいいのか考えていると、袁紹さんが口を開いた。

「まあ、もし断るというなら連合軍全体で白浜軍を包囲するということになるでしょうけど。」

「はっ・・・！？」

サラッと脅してきたよ！この人！！どうしよう、このままじゃ又最前線送りだ。僕はともかく愛紗さん達を危険な状況に晒すわけにはいかない。

と、この時僕の脳裏に一瞬、悪友の姿がよぎった。まるで何かを告げるように・・・

「解りました。引き受けます。」

「あら、理解が早くて何よりですわ。」

「ただし条件があります。」

新島のように上手く交渉出来る自信は無いが、僕がやらないと皆が危険な目に遭っちゃう・・・！！

「一つ目は僕達の軍は装備が貧弱なので、他の陣営から武器と人員を提供して下さい。」

「ふむ・・・まあいいでしょう。」

「もう一つは僕達が戦っている間に必ず他の陣営を動かして下さい。」

「それはどういう意味ですの？」

「僕達が前線で敵の主力を引きつけるので、その間に虎牢関を攻めて欲しいんです。」

「自分達を囮にするということですのね。殊勝な考えですわね。いいですわその条件呑みましたわ。」

袁紹さんが承諾した後、僕はそのままテントから出て行った。その際公孫賛さんが、役に立てなくてスマン、と謝りに来てくれた。公孫賛さんは悪くないんだけどなあ。

しかし、悔しいことに、こうやって交渉なんてことをしてみると、改めてアイツの凄さがわかるなあ。

「というわけで僕達が最前線を務めることになりました・・・」

陣地に戻り、愛紗さん達に説明する。正直申し訳なさでいっぱいです。

「袁紹め、脅迫などしてくるとは。何という卑劣な・・・！！」

「ホント、信じられないのだ・・・」

袁紹さんのあまりの仕打ちに皆怒ったり、呆れている。

「大丈夫です、皆さん！そんなに悲観することはありませんよ。」

重いムードを破るかのように、何かを閃いた朱里ちゃんが口を開いた。

「朱里、何か考えがあるのか？」

「はい！ご主人様がこちらに有利になるような条件を提示してくれたおかげで策を練ることが出来ました！」

朱里ちゃんが言う条件とはさっき袁紹さんに提示したあの二つだろう。朱里ちゃんは褒めてくれてるみたいだけど、僕としてはあれは苦し紛れに言ったものなんだけどな。

「それで朱里、どういった策なのだ？」

「えっとですね、簡単に言いますと、？水関の意趣返しをします。」

「魏軍と呉軍が前進を開始しました！私達も後退する準備を！！」

朱里ちゃんが考えた策とは、僕が提示した二つ目の条件・『僕達が敵軍を相手している間に魏軍や呉軍が虎牢関を攻撃する』

これを逆手に取り、魏軍と呉軍が虎牢関攻撃のために前進して来たら、僕達はすかさず後退、そのまま敵を魏軍と呉軍に押し付けるというもの。つまり、？水関で僕達がやられたことをそのままお返しするのだ。

「ご主人様、敵が魏軍と呉軍に食らいつきました。作戦は成功です。」

愛紗さんが作戦の成功を報告してくれた。これで後は虎牢関が攻略されるのを待つだけだ。

「あの皆さん、ちょっといいですか？」

作戦成功で一息ついていると、何故か険しい表情の朱里ちゃんが話しかけてきた。

「もう一度前線に出てみませんか？」

「えっ、どうして？」

「今なら漁夫の利を狙い、虎牢関への一番乗りを狙うことが出来ます。そうすれば私達の名を天下に広める絶好の機会になると思うんです。」

成程・・・確かに名を挙げるなら今が好機ってことか。

「僕はかまわないけど、皆はどう？」

「私も異論はありません。」

「鈴々もいいのだ！」

というわけで全員の賛同を得て、僕達白浜軍は再び戦場に舞い戻ることになった。

「手の空いてる人は鈴々の方を手伝うのだ！！」

味方と敵軍の乱戦の中を潜り抜け、何とか虎牢関の城門に取りついた。今は鈴々ちゃん達を中心に城門の破壊を試みている。
そして、

「やった！！突入開始なのだ！！」

一際大きい音が響き、城門が完全に破壊された。

「中央突破で一気に砦を制圧するぞ！！」

愛紗さんの指示が飛び、皆が砦の中へ攻め込んでいく。かくいう僕も味方に被害が出ないように素早く敵兵の動きを奪い、気絶させていく。しかし気になるのは、

「この砦はもう落ちます！降伏して下さい！！」

「黙れ！！逆賊が！！」

「我らは降伏などせぬ！！」

このように敵兵に降伏を呼び掛けても、全く聞く耳を持ってくれないのだ。
しょうがないので、まずは斬りかかって来た相手に扣歩で相手の側面に入り、

「擺歩！！」

そのまま相手の足を引っ掛け、地面に叩きつけ気絶させる。
そして味方がやられて怯んでる敵に一気に接近し、

「裡肘託塔！！」

片手に両手分の力を込める突きあげを顎に放ち気絶させる。

しかし妙だなぁ。董卓が暴君ならこの人たちも無理矢理戦わされている筈なのに、今戦った分にはそんな気配微塵も感じられなかったんだけど。

「どけーー！！我が道を遮るな！！」

兼一が戦っているとは少し離れた場所で関羽も同じように戦っていた。

「関羽将軍！！」

関羽の下へ顔を青くした伝令兵がやって来た。

「どうした！？」

「呂布です！！前線にて我が軍の兵を次々と屍に・・・！」

「呂布だと！？敵の将軍のお出ましというわけか。てっきり外で戦っているものとばかり思っていたが・・・！よし！私が行く！！兵を下がらせておけ！！」

「はっ！！」

そう言い、関羽は前線へと走って行く。

「弱い・・・」

虎牢関内部にて呂布は侵入して来た白浜軍の兵を次々と屍に変えて行った。彼女の周りに転がっている屍の多さが彼女の恐ろしさを語っている。

そして次の獲物を狩りに行こうとしたところで、

「我が名は関羽！！これ以上我が兵に手を出すことは許さん！！」

呂布の前に関羽が立ちふさがった。

「お前が関羽か・・・来い・・・！！」

「言われずとも！！ハアアアッ！！」

関羽は青龍刀を呂布に向かって振り下ろすが、

「なにっ！？私の攻撃を」

呂布は難なくその一撃を受け止め、押し返してくる。

「・・・二人まとめて来い。どうせ負けない・・・」

「二人だと？」

「にゃはは、ばれちゃったのだ。」

呂布の言葉を関羽が訝っていると、そこに張飛が現れた。

「鈴々、何故来た！？」

「愛紗だってわかってるでしょ、こいつ物凄く強い・・・」

「フッ・・・そうだな、行くぞ！！」

武器を構えなおし関羽と張飛は呂布へと突撃して行った。

幾度か鍔迫り合いがあったものの、未だ関羽、張飛、呂布には傷らしい傷は無かったが、関羽と張飛の顔には疲労が濃く浮かんでいた。対して呂布には疲労らしきものは窺えない。単にポーカーフェイスなだけかもしれないが。

「こいつ化け物なのだ・・・」

肩で息をしながら蛇矛を杖代わりにして立っている張飛がぼやく。

「だが、負けるわけにはいかん！！」

「フン・・・」

関羽は再び呂布へ打ち込むが、疲労のせいで握力が鈍っていたのか武器が弾かれてしまう。

「これで・・・終り・・・」

（ここまでか・・・）

呂布の一撃が迫る中、覚悟を決めたのか目を閉じる関羽。

「愛紗さん！！危ない！！」

だが来るはずの一撃は何故か来ず、その代わり聞き覚えのある声が聞こえ、関羽が目を開けてみるとそこには自分の前に立ち、呂布の一撃を胴体にくらう兼一がいた。

ＢＡＴＴＬＥ１０　前門の虎、後門の狼（後書き）

若干ケンイチピンチです。
まあケンイチファンなら胴体と見て何か思い出すでしょう。
それと呂布の強さは弟子以上達人未満というランクです。
では感想・批評待ってます。

ＢＡＴＴＬＥ１１　白装束と黒装束（前書き）

すみません！関西にいたんで地震は大丈夫でしたが、風邪を引いてしまい、そのせいで更新が遅れてしまいました。みなさんも風邪には用心を。

BATTLE11　白装束と黒装束

「ご主人様！？」

「お兄ちゃん！？」

関羽と張飛の目の前で兼一は呂布の一撃をまともに受け、倒れてしまう。

「・・・邪魔が入った。」

仕切りなおしと言わんばかりに呂布は再び武器を構える。
それを見て関羽と張飛も兼一を庇うような形で武器を構える。

だが、

「何のー！！まだまだー！！！！」

「「「！？」」」

その場に立ち上がる筈が無いと思われていた男の声が響いた。

伝令兵からが現れ愛紗さんと鈴々ちゃんが戦っていると聞き、急いで駆けつけると、今まさに愛紗さんに止めを刺そうとする呂布（らしき女性）が見えたので反射的に飛び込んだ。

そして呂布さんの一撃を喰らったわけなんだけど・・・

「・・・お前、どうして立てる・・・？」

「この鎖帷子のお陰です！」

そう言って胴着をめくり、鎖帷子を見えるようにする。さすがに無傷というわけにはいかず、攻撃を受けた所から若干出血している。愛紗さん達は安堵した表情となっている。対して呂布さんはあまり表情は変わってない。

しかし、このしぐれさん特製の鎖帷子が無かったら、絶対死んでたな・・・

「・・・なら次は頭を潰す。」

「愛紗さん、鈴々ちゃん下がっていてください。僕が行きます・・・！！」

さすがに三対一というわけにはいかないので、二人には下がってもらった。というか既に二人とも疲労が限界に来ているのが分かる。

「わかった、ちょっと悔しいけどお兄ちゃんに譲るのだ。」

「止めはしませんが、・・・お気をつけください。」

二人ともそれを分かってくれたみたいで、退いてくれた。

「・・・行く・・・・！！」

呂布さんが振り下ろした斬撃を横へ体をずらすことでかわす。その

後も繰り出される攻撃を最小限の動きでかわしていく。

戦ってみて解ったことだが、呂布さんの実力は？水関で戦った華雄さんの二段階は上を行っている・・・！おそらく呂布さんの純粋な実力は弟子クラスを超えているだろう。
で、そんな呂布さんと僕が何故互角に戦えるのかというと、ポーカーフェイスで解りづらいが、愛紗さんや鈴々ちゃんと戦った疲労のせいだろう。
だが、それでも呂布さんの技量は凄まじく、このままでは防戦一方のままやられてしまうだろう。
だから、使うしかない・・・！！あれを・・・！！

（・・・雰囲気が変わった・・・？）

呂布は目の前の相手、兼一の雰囲気が突然変わったのを察知した。
だがその変化の正体がイマイチよく解らなかったので、再度突っ込むことにした。
だが、

「・・・当たらない・・・！？」

呂布の繰り出す攻撃が全て当たらなくなったのである。無論、さっ

きまでの攻撃も決定打こそ無かったが、それでも兼一を確実に追い込んでいるはずだった。
それが今では決定打はおろか、全ての攻撃が空を切ってしまう。

よし、見えるぞ！！呂布さんの流れが！！
相手の目を見て流れを読む、静の極みの技の一つ「流水制空圏」によって呂布さんの攻撃をかわしていく。
このまま間接技まで持っていく・・・！！

「・・・くっ・・・！」

呂布さんは僕を近づかせまいと、後方に下がって距離を取ろうとするが、その動きは読んでます！！って・・・何だ今のは・・・？ハッ集中しないと！！
呂布さんが後退するよりも速く、呂布さんが目指すであろう場所を占領する。結果、呂布さんは自分から懐に僕を入れた形となる。
そしてそのまま呂布さんに態勢を整える暇を与えず、間接を極める！！

「・・・離せ・・・！！」

「ここまでです。降伏して下さい。」

「くっ、・・・わかった。」

対抗するのを諦めてくれたみたいで、呂布さんはそのまま武器を取

り上げられ僕達の陣地に連れて行かれた。
その後、嬉しそうな表情の鈴々ちゃんと、逆に申し訳なさそうな表情をしている愛紗さん僕の方に駆け寄って来た。
そして予想通り、愛紗さんの口から出てきたのは謝罪の言葉だった。

「申し訳ありません、ご主人様。御身を守る立場である私が逆にかばわれてしまうとは、面目ありません。」

「何言ってるんですか愛紗さん。僕達は仲間なんですから、仲間を助けるのに立場とかは関係ありませんよ。」

「そうだよ愛紗、お兄ちゃんはそんなこと気にしないって。」

鈴々ちゃんがフォローを入れてくれるが、それでも愛紗さんの顔色は晴れない。
だから、こう言うことにした。

「それでも愛紗さんが気にするなら、次は僕を助けて下さい。それでおあいこで、帳消し・・・っていうのじゃ駄目ですか？」

うん、間違ったことは言ってないはずだ。

「解りました。ならこの恩に次は必ず報いてみせます。」

そう言うと、凛々しい表情に戻ってもらえた。

「ところでお兄ちゃん、傷は大丈夫なの？」

「うん、そんなに大した傷じゃないと思うよ。」

この後、虎牢関は陥落し、連合軍は洛陽まで一気に進軍することになる。
そして僕はこの傷を治療しなかったことを後悔する羽目になる・・・

「あれが洛陽・・・」

僕の目の前には都である洛陽が広がっている。だが遠目に見てもほとんど無人の都と化しているのが解る。

「ねえ朱里ちゃん、こういう場合どうなるのかな？」

「そうですね、この状況には袁紹さん達も困惑していると思います。ですので今の内に呂布さんに話を聞いてみてはどうでしょう？華雄さんと違い、何か話してくれるかもしれませんし。」

「よし、それならそうしてみよう。」

朱里ちゃんの提案により、一旦陣地まで戻ることにした。

陣地に戻った後、拘束された呂布さんを僕達がいる天幕まで連れてきてもらった。又、護衛として愛紗さんと鈴々ちゃんが同行している。ちなみに華雄さんは何も話してくれないだろうということで連

れてきてもらってない。

「あの、僕達の質問に答えてもらえますか、呂布さん？」

「・・・・・・・・・」

質問してみるも呂布さんは無表情のまま何も喋ろうとしない。

「貴様！！少しは何か喋らんか！！」

「・・・・・・・・・」

愛紗さんも呂布さんに向かって叫ぶが、やっぱり喋ってくれない。

「呂布さん、僕はあなたが悪人には思えません！！それなのにどうして暴君である董卓をかばうんですか！？」

これはまぎれもない本心だ。呂布さんとの最後の攻防の中、呂布さんの目から何かを守りたいという強い感情が読み取れた。だからてっきり僕は呂布さんが董卓に無理矢理戦わされているものと思い込んでいた。だが、返って来た答えは僕が考えてたものとは、全く違っていた。

「・・・違う。月は優しい・・・」

ここで呂布さんが初めて僕達の質問に答えてくれたが、聞いたことのない名前が出てきた。ユエ・・・誰かの真名だろうか？

「あの呂布さん、月って誰のことですか？」

「・・・董卓、真名・・・」

成程。董卓の真名が月というわけか。あれ、でもそうなると・・・

「董卓が優しいとはどういうことだ？奴は暴君なのだろう？」

愛紗さんが僕と同じ疑問を呂布さんにぶつける。

「（フルフル）月悪くない・・・白い奴・・・そいつが悪い・・・」

愛紗さんの問いに首を横に振る呂布さん。

白い奴、今度は誰だ？

「あの、白い奴って誰のことです？」

「（フルフル）・・・知らない・・・」

どうやらその白い奴の名までは知らないみたいだ。

その後も質問を続け、色々と聞き出せた。

簡単にまとめると、董卓は暴君ではなく、白い奴が元凶ということ。

洛陽の民は白い奴が追い出したということ。洛陽にいる兵を率いているのは賈駆（真名は詠というらしい）という軍師。と、こんなもんである。

「朱里ちゃん、董卓が暴君じゃないっていうのはどう思う？」

「そうですね・・・ここまで真逆な内容の情報にこれほど多くの人間が騙されるなんてことは普通ありえません。かといって嘘にしては突飛すぎますし・・・」

さすがの朱里ちゃんもこんな事態は予測出来ずにいたようだ。

「ともかく真偽を確かめるためにも洛陽へ行くべきだと思います。」

何にせよ、洛陽には行かなきゃいけないということか。

話にひと段落ついたところで、僕は呂布さんの方に向き直り、さっきから考えたことを提案してみることにした。

「呂布さん、僕達の仲間になりませんか？」

「「「えええぇぇぇ！！？」」」

「ご主人様！こやつは敵ですよ！！こやつのせいで兵にどれほどの被害が出たと思っているのですか！？」

「忘れろとは言いません。でもこれから先、力の無い人達を守っていくためにも力をつけないと・・・」

それに何かを守るために戦っていた呂布さんとなら一緒に戦える気がする。

「私はご主人様の意見に賛成です。」

「朱里！？」

「ご主人様の言うとおり、これから先の乱世を生き残るためにも、力をつけないといけませんし。」

「それは解ってるが・・・！」

「・・・なぜ？」

ここで今まで黙っていた呂布さんが口を開く。

「・・・なぜ弱い人を守る？」

何故か・・・何故と言われてもなあ・・・

「それが僕の信念だからです。それと僕自身も昔は弱かったから、弱い人が虐げられる痛みとか怖さが解るんです。だから、そういう思いを他の人に味わって欲しくないというのもあります。」

そう言って、かってのフヌケンと呼ばれていた頃を思い出す。もし美羽さんに出会わず、梁山泊にも入ってなかったなら、僕は今でもいじめられっ子のままだっただろう。

「・・・二つ。仲間になる条件・・・」

昔を思い出してると、呂布さんが口を開いた。条件？どんなものだろか？

「・・・一つ。恋の家壊さない・・・」

「朱里ちゃん、出来る？」

「はい！洛陽に入城した際、呂布さんの家に陣を敷けば、それは可能です。」

「じゃあ一つ目は可能ということで、もうひ一つは何ですか？」

「・・・お金。」

あれ、何か意外な言葉が出てきたな。呂布さん、そういうイメージとは程遠いのに。

「えっと、どれくらいですか？」

「・・・いっぱい。」

又、随分と抽象的だなあ。

「・・・みんながいっぱいご飯を食べられるぐらい。」

「みんなっていうのは呂布さんの仲間ですか？」

「（コクッ）・・・友達。」

「何人くらい居ますか？」

「・・・５０匹。」

「動物なんですか？」

「（コクッ）」

動物５０匹分のえさ代ならおそらくなんとかなるだろう。

「わかりました。その二つの条件呑みます。」

そう言って、呂布さんの拘束を解いてもらう。若干緊張が走ったが、

心配するようなことはなかった。

「・・・恋。仲間だから真名・・・」

「じゃあ恋さん。これからよろしくお願いします。」

こうして恋さんは僕達の仲間になってくれた。

恋さんが正式に僕達の仲間になった後、袁紹さんから白浜軍に洛陽の様子を探ってくる、という命令が下された。？水関から続くあまりの使い走らせっぷりに、僕と朱里ちゃんはもう苦笑いしか出てこなかった。

洛陽に着いた僕達が見たのは無人とも言える都の姿だった。

「ホントに誰も居ないね・・・」

「静かすぎて不気味なのだ。」

各々が無人の都に対して感想を言っている中、恋さんだけは何かに対して警戒しているようだった。

「・・・白い奴の気配が無い。」

「それは逃げたということでしょうか？」

「・・・違う。隠れている・・・？」

隠れている？でもこの辺りからは殺気はおろか気配らしいものは何も感じられない。

一応警戒しつつそのまま恋さんの家に向かった。

恋さんの家にたどり着くと、そこには多種多様な動物たちがおり、その全てが恋さんに懐いていた。まるでアパチャイさんみたいだ。

そのまま一息ついていると、突然息を切らした兵がやって来た。

「どうしたというのだ！？」

「敵襲です！！突然、おかしな白装束の集団が現れ、我が軍に仕掛けてきました！！」

「白装束って・・・まさか恋さんの言っていた白い奴か！？」

すぐさま僕や愛紗さん達は恋さんの家を飛び出すが、家を出た瞬間、

「「「「！！？」」」」

周りの家々にでも隠れていたのか、次々と白装束の集団が現れ、僕

達に襲いかかって来た！！

「洛陽に？」

「ハッ。そのようです。」

ここは洛陽の外で待機中の連合軍、その中の魏の陣地である。今曹操は部下の夏侯淵から、客将として扱っている一人の男が洛陽に独断で向かったとの報告を受けた。だが、考え無しに動く奴ではない、という曹操の判断により現状維持のままとなった。

突然襲いかかって来た白装束の集団と戦闘状態となり、最初は混乱状態であったが、敵は数は多いものの、一人一人の実力はあまり高くないということと、愛紗さんや恋さんが中心となって戦うことで段々と持ち直してきたのだが、何よりも不気味なのは、

「白浜は世界を滅ぼす悪なり！！悪を滅ぼすは正義の責務なり！！」

「白浜は世界を滅ぼす悪なり！！悪を滅ぼすは正義の責務なり！！」

「白浜は世界を滅ぼす悪なり！！悪を滅ぼすは正義の責務なり！！」

全員が口々に同じことを言い、感情のようなものもほとんど感じ取れず、まるで機械を相手にしているような感じだ。
それにしてもさっきからこの辺りがやけに煙っぽいのはどうしてだ？土煙にしては妙に白いし・・・まさか！煙幕なのか！？

「白浜は悪なり！！悪に加担するもこれ悪なり！！」

「ええい！ご主人様が悪なわけないだろう！！出鱈目を言うな！！」

「・・・うるさい。」

煙幕の煙が広がる中、関羽と呂布が白装束の集団と戦っていた。

「全く、次から次へと・・・！！しかも煙に乗じて襲ってくるなど卑怯な・・・！！」

「はわわ！大変です！私達いつの間にかご主人様と分断させられてしまってます！！」

「何だと！？」

その言葉を聞き、関羽達は周りを見渡すが、兼一の姿は見当たらない。

「大丈夫なのだ！お兄ちゃんは強いから、ちょっとやそっとのことじゃ、やられないのだ！！」

「いえ、この場合確実に伏兵が存在しています。」

関羽は孔明の予測を聞き、すぐさま兼一の下へ向かおうとするが、思うように先に進むことが出来ない

（ご主人様を守ると言っておきながらこのザマとは・・・私は何をやっているんだ・・・）

関羽達が白装束の集団に行く手を阻まれていたその時、

「ホワタタタタタタタタタタタタタ！！！！！！！」

突然戦場に謎の野太い声が響き渡る。

「なんだ！？」

「わかりません！敵の新兵器でしょうか！？」

「私のお家を壊しといて、逃げようなんてそうは問屋が卸さないわよーー！！！！」

野太い声が響く度に白装束達が吹き飛ばされていく。

「これは・・・声！？」

「これが人の声だというのか！？」

「フンヌ―！！！！」

謎の声の持ち主は白装束と敵対してるということもあって、とりあえず敵でないという判断を下し、関羽達は兼一の下へ急ぐことにした。

「でああ！！」

白装束に向かって上段蹴りを放ち、そのまま気絶したのを確認する。煙幕のせいで解りづらかったが、戦っている内に移動させられてたようで、気づくと完全に孤立させられていた。だが、一応今倒した白装束で打ち止めらしく、今のところこれ以上襲ってくる気配は無い。

「イテテ、やっぱちょっと痛むな・・・」

虎牢関で受けた傷が時間が経ったことで痛み出してきた。負傷兵を優先したため、僕は後回しになったのだが、やっぱりちゃんとした治療を受けとくべきだったかな・・・？

「！？」

突然殺気が走り、直感で横に跳ぶと、今まで僕の居たところを鋭い蹴りが横切る。あのまま立っていたなら直撃だっただろう・・・そして僕の目の前には白装束の青年が立っていた。さっきまで僕が戦っていた連中と違うのは、顔を隠していないことと、機械的な感じがしない、そして・・・かなりの手練だということ。おそらく僕と同等、もしくはそれ以上の使い手だ・・・！！

「お前が史上最強の弟子か。大したことは無さそうだな。」

「誰だ、君は！？」

「フン、教えてもしょうがないが、まあいいだろう。俺の名前は・・・左慈だ！」

言い終わるやいなや一気に接近して蹴りを放ってきた！
避けれないと思ったので右腕でガードしたが、

「ガアアッ！！？」

右腕だけじゃ衝撃を殺しきれずに胴体にまで衝撃が走った。しかも悪いことにその衝撃のせいで傷の痛みが更に増してしまった・・・！

「クッ・・・！」

苦し紛れに突きを何発か撃つが、痛みのせいで力が乗せられず、全てかわされてしまった・・・！

「終りだ！！」

「ゴホッ！！」

カウンター気味の蹴りを腹部に喰らい吹っ飛ばされてしまう。マズイ・・・意識が・・・

「とどめをさしてやる。」

左慈が近づいて来るのがわかるが、どうにも出来ないのが自分で解る・・・
もはや諦めかけた時、
「烏龍盤打！！」
僕と左慈の間に、いきなり誰かが割って入って来た。
その人は白装束とは対照的な真っ黒なフードをかぶっていた。そして今使った劈掛拳。この格好でその技を使う人物を僕は一人しか知らない。
「た・・・」
口は悪いが、僕が最も信頼してるとも言っていい友達の一人。
「谷本君！！」

ＢＡＴＴＬＥ１１　白装束と黒装束（後書き）

やっと夏君出せたー！これでケンイチキャラは全員出そろいました。次回は翔も出します。ちなみに夏に一番似合うのは魏でも蜀でも呉でもなく・・・南蛮だと思います。反論は認めません。

ＢＡＴＴＬＥ１２　鳥と隠者と弟子（前編）（前書き）

アクセス９万突破！！お気に入りも１００人突破！！めっちゃ嬉しいです。

BATTLE12　鳥と隠者と弟子（前編）

「よし、逃げるなら今の内だな。」

ここは洛陽の城の付近、董卓と賈駆、そして叶翔が洛陽からの脱出の準備をしていた。

「確かに白装束達が出払ってる今が好機ね。」

先程、城に居座っていた白装束達が急に居なくなり、これ幸いとばかりに、賈駆と翔はかねてより計画していた通り、連合軍が突入して来る前に董卓を逃がそうというのだ。ちなみに白装束達は現在、兼一達と戦闘中である。

「ごめんね詠ちゃん、翔。私なんかのためにここまでしてくれて。」

「何言ってるの月、当然じゃない。それにこいつだって少しは役に立てないと！」

「ひどい言われようだけど、まあ任せなって。」

「頼んだわよ翔。」

こうして賈駆と董卓、そして翔を乗せた馬車は出発した。

「谷本君、どうしてここに！？」

「話は後だ！！まずはこいつを潰す！！」

いきなり僕の前に現れた夏君は僕を庇う形で左慈と戦い始めた。色々と聞きたいことはあるが、谷本君の言うとおり左慈をなんとかしなきゃいけない。どうやら僕の代わりに谷本君が戦ってくれるみたいだ。

「このイレギュラーが！俺達の邪魔をするんじゃねえ！！」

「そんなもん知るか！あいつは俺の獲物だ！横取りすんじゃねえ！！」

物騒な単語が聞こえたが、気にしないでおこう。いつものことだし。

「斧刃脚！！」

「くっ！！」

今のところ夏君が押してるみたいだ。左慈の脚をまずは潰し、そのまま八極圏を使った接近戦に持ち込んだ。蹴り技を封じられた左慈は防戦一方になっている。

「擠身靠！！」

「ゴホッ！！」

谷本君は左慈の脇腹を掴み、肩での当て身を喰らわせ左慈を吹っ飛ばした。

だが、左慈を倒すには至らなかったようで、内臓にダメージを負ったのか口から血を流しながらも左慈はまだ立っていた。

「傀儡共もそろそろ限界だろうし、ここらが退き時か。」

「おい逃がすと思ってんのか？」

「フン、心配するな。てめえはそいうを殺した後、必ず殺す。」

そう言い捨てると、左慈は僕達の前から文字通り姿を消した。

「ところで谷本君はどうしてこの世界に？」

左慈を撃退した後、愛紗さん達と合流しに向かっている。ちなみに怪我が割とひどかったので、谷本君の肩を借りて歩いている。

そして丁度いい機会だったのでこれまでの互いの情報を交換をすることにした。

聞けば、谷本君は気付いたら突然この世界に来ていたらしく、野盗や黄巾党と戦っていたら、同じ様に野盗狩りをしていた曹操さんと出会い、そのまま気に入られ、客将として扱われることになったらしい。そして白浜兼一という名の天の御遣いが蜀にいると聞いて、僕が来てることも知ってたみたいだ。

その後、僕の方もこちらであったことを谷本君に話した。

そしてあの白装束の話題へと移って行った。

「谷本君、あの白装束の連中を見たことある？」

「いや、俺があいつらを見たのは今回が初めてだ。」

「僕はあの白装束と遭ったことがあるんだ・・・元の世界で？」

「何！？」

驚く谷本君に、裏社会科見学で彼等に遭い、彼等が狙っていた鏡のせいでこの世界に来てしまったことを話した。

「どう思う？」

「お前の話を聞く限り、鏡がこの世界に来るための鍵だとして、それを回収してたってことはこの世界に別の世界の人間が来ないようにしてたってとこだろう。」

「でも、僕や谷本君は実際来てるわけだし。」

「ああ、だから必死になって異物を排除しようとしてるんじゃないか？まっ、推測だがな。」

異物か・・・谷本君の言葉がやけに引っかかる。もし谷本君の推測が正しいなら僕達はこの世界に居てはいけないんじゃないだろうか・・・？

「おい、変に悩んでもしょうがねえぞ。」

「へっ？」

どうやら悩んでいたのがばれたみたいだ。

「どのみちあの連中は俺かお前の前に又現れるだろう、その時に連中の正体や目的を暴けばいい。違うか？」

「あっ・・・うん。」

「なら今悩む必要はねえだろ。」

どうやら谷本君は谷本君なりに僕を心配してくれたみたいだ。やっぱり持つべきものは良い友達・・・

「オイ、急にお前をぶん殴らないといけない気がしてきたんだが？」

「ハハハ、キノセイダヨ。」

話している内にかなり歩いていたみたいで、前方から愛紗さん達が駆け寄って来るのが見えて来た。

愛紗さん達と合流し、怪我の治療も済ませ、谷本君を紹介したが、その際魏に居るということで愛紗さん達が苦い顔をしたが、僕の友達ということで納得してもらえた。

「それで、白装束は全員倒せたんですか？」

「ええ、意外な助けもあり、全滅することが出来ました。」

「意外な助け？」

「それはワ・タ・シよん。」

ん？何だ？今の野太い声と、それに全くマッチしてない口調は？僕の第六感が振り向くなと全力で警告してるんですけど・・・

よし勇気を振り絞って・・・

「ウフン。」

よし僕は何も見てない。決して逆鬼師匠やアパチャイさん並のガタイで剃髪で三つ編みの人がビキニパンツ一丁でセクシーポーズでオカマ口調で喋ってるのなんて見てない。

ふと横を見ると、珍しく谷本君も顔を引き攣らせていた。

「この者のおかげで思いのほか早く白装束を一掃させることが出来ました。」

「めちゃくちゃ強かったのだ。」

どうやらこの人は見た目は怪しいが悪い人ではないみたいだ。

見た目のショックも薄れ、谷本君が話しかけようとしたのだが・・・

「おいオッサン、ちょっと・・・」

「喝ァァァァァァァァッ！！！！！」

谷本君の言葉を達人級の気当たりが遮った！！

まさかこの人達人級・・・！？

「ちょっと、オッサンんて誰よ？誰のこと？」

「いや・・・だからあんたがオッサ・・・」

「喝ァァァァァァァァッ！！！！！」

また達人級の気当たりが来た！！っていうかこの意外とどうでもいいこと気にしてるんだな。谷本君も懲りたのかオッサンと呼ぶのは控えたみたいだ。

「全く失礼しちゃうわね。花も恥じらう漢女に向かってオッサンなんて。私には貂蝉っていうれっきとした名前があるんだから。まあイケメンだし許しちゃうわ。」

「「えっ？」」

ちょっと待って。今この人の名前何て・・・？

「あの、あなたの名前もう一度いってもらえませんか？」

「あらん、いやねえ私の名前に興味津津なの？イケナイ子ねえ。」

「いや興味津津と言いますか・・・」

「いいわ。あなたかわいいから教えてあげる。私の名前は貂蝉、歌と踊りを生業とする絶世の美女よ。」

やっぱり・・・！聞き間違いじゃなかったんだ・・・まさか世界三大美女とも称される貂蝉がこんな風になってたなんて・・・！！

愛紗さん達の時とは違った、嫌な驚きだなあ・・・

「待て貂蝉とやら、ひょっとしてお主は洛陽の住人だったのか？」

「ええ、そうよ。」

「ならご主人様、こやつから洛陽のことを聞いてはいかがでしょう？」

あ、そっか。こんな怪しい人でも一応僕らにとっては貴重な情報源なのか。

「色々と聞きたいんですが、いいですか貂蝉さん？」

「いいわよ、私みたいなしがない踊り子に答えられることなら、何でも。」

「どこがしがないんだよ。」

谷本君の突っ込みは華麗にスル―された。

「そういえば、あなたたちはどなた？」

「鈴々達は反董卓連合軍なのだ？」

「董卓の暴政から洛陽を解放するために、幽州からやってきたものだ。」

「暴政、暴政って何のこと？」

「董卓が洛陽の民に圧政を敷いていた、と聞きましたが。」

「董卓って人が？そんなことしてないわよ？」

「えっ、それってどういうことですか？」

「どういうことも何も言葉通りよ。洛陽の民が圧政に苦しんでいたなんてこと、今まで無かったもの。」

「ちょっと待って下さい、それはホントですか？」

「ええ、みんな平和に暮らしていたわよ。少し前まではね・・・」

「今は違うってことですか？」

「違うというか・・・変な奴等が洛陽に住んでいた人達を追い出しちゃったのよ。私のお家もあいつらにこわされちゃったし。」

「それで怒ってたのか？」

「そうよ！あいつら絶対許さないんだから！！」

頭から湯気が出そうなほど、真っ赤になって貂蝉さんは怒りを表している。

しかし、貂蝉さんの言うとおりなら全てがおかしい気がする。

一応恋さんの言っていたことの裏が取れたわけだけど・・・

「朱里ちゃん、こんなことってありえるの？」

「絶対にありえません。洛陽の内と外で情勢が対極になるなんて・・・」

「状況が全然違いすぎるもんねー。」

「ですが、実際に連合軍の何十万人という人間が誰もこの事実に気づいていないんです。こんなことが現実にあるんでしょうか・・・？」

谷本君の方に目配せをしたが、谷本君も知らなかったようで首を横に振って返された。

「となると、考えられるのは誰かが意図的に情報を操作したんです。それも洛陽から住人を退去させるなんて大がかりなことをやってのけて、情報操作が露見しないように細心の注意を払った・・・そして情報を操作して徳をするのは・・・」

「白装束の奴らか！」

「はい、そして白装束の人達の目的はご主人様を殺すこと・・・」

「つまり・・・この戦自体が僕の命を狙うために仕組まれてたってこと？」

「はい、おそらく・・・」

「でも、どうしてそこまでしてお兄ちゃんを殺したがるのだ？」

「そりゃ誰かが得をするんでしょうね。もしくはあなたが死ぬことで何かが元通りに戻るとか・・・」

貂蝉さんの言葉を聞いて僕と谷本君はハッとする。さっきの谷本君の言葉が脳裏に甦る。

『異物を排除しようとしてるんじゃないか？』

「どうやら俺の推測もあながち違うってわけじゃなさそうだな。」

「うん、そうみたいだね。」

「ご主人様、何か心当たりがあるのですか？」

「うん、まあ一応。でもその心当たりも確証かどうか解らないんだけど・・・」

「なら気にする必要はないんじゃないかしら。」

「確かにそうですね・・・」

貂蝉さんの言葉に納得していると、腰をクネクネとくねらせている貂蝉さんが目に入る。この動作と格好が無ければ割と良い人だと思うんだけど・・・

「よし朱里ちゃん！白装束のことは一旦置いといて、洛陽制圧の方を優先したいんだけど、いいかな？」

「そうですね。ご主人様の言うとおり、今は自分達の出来ることをした方が良いと思います。」

「よーし！制圧作業は任せろなのだ！！」

「解りました。・・・制圧はいいのですが、あのご主人様。」

「どうしたの愛紗さん？」

「いつまでその者を陣に置いておくつもりですか？」

「あっ・・・」

そうだ、忘れてた。つい、いつもの感覚でいたけれど谷本君は立場上、敵だったんだ。

「谷本君はこれからどうするの？」

「曹操の所に戻るだけだ。」

「そうか行っちゃうんだ・・・何か寂しいな・・・」

「フン！俺は清々するけどな。」

「もう強がっちゃって、なっつんたら！」

「誰がなっつんだ！？」

そんな風に谷本君と漫才をしていると、伝令兵がやって来た。

「どうした！？また白装束か！？」

「いえ違います！先程、貴人らしき人物数名を乗せた馬車を保護しましたので、報告に参りました。」

「貴人ということはひょっとすると董卓の関係者かもしれませんね。」

「どうしますご主人様？」

「よし、会って話を聞いてみよう。ひょっとしたら白装束について何か知ってるかもしれないし。」

この時、僕は何故かこの馬車に乗ってる人物に絶対会わなければいけないと感じていた。

ＢＡＴＴＬＥ１２　鳥と隠者と弟子（前編）（後書き）

久々の執筆でブランクを実感しました。やっぱ間空くといけませんね。
更新速度速めていきたいと思います。
次回はサブタイ通りあの３人が出会います。公式で夏と翔が仲良しという設定が出たのでこの小説にとっちゃありがたいです。
では感想まってます。

ＢＡＴＴＬＥ１３　鳥と隠者と弟子（後編）（前書き）

すみません物凄いスランプに陥ってました。

BATTLE13　鳥と隠者と弟子（後編）

「どうすんのよ。いきなり捕まっちゃったじゃない！」

洛陽の城から脱出してすぐ、翔達は部隊を展開していた白浜軍に発見され、呂布の家に敷かれた陣に御車ごと運ばれた。その車内で賈駆は翔に毒づく。

「まさかこんな早く捕まるとはなあ。」

翔一人なら洛陽から脱出し、連合軍の包囲を抜けることも不可能ではないが、董卓と賈駆が居るこの状況ではそうも行かない。そして翔の視界に黒髪の少女を先頭としたこの陣地の幹部らしき一団がやって来るのが見えた。その一団を見て彼は身震いした。見つけたのだ、一団の中に数少ない親交をもった黒いフードの青年と、自分の信じるもののために戦った宿敵の顔があったのを。

「おい、詠、月。」

「何よ？」

「助かるアテがあったぞ。」

夏は本来なら兼一を助け、送り届けた時点でさっさと魏の陣地に帰るつもりだった。その後の貂蝉とのやり取りはしょうがないとして、

情報が得た所で今度こそ去ろうとした矢先、貴人を保護しただので、なんやかんやでついて行くことになった。だがこの時、夏も兼一と同様に保護された人物に会わなければならないというのを心のどこかで感じ取っていた。

洛陽の城から逃げてきたとおぼしき人物に話を聞くためにやって来たわけだが、そこにいる人物を見て僕はあまりにありえない光景に呼吸が止まるような感覚に陥った。

「ご主人様、どうかしましたか？」

愛紗さんが僕の様子が急におかしくなったのを心配して声を掛けて来たが、返事を返すことすら出来ない。
案内された場所に居たのは高貴な身なりをした二人の女の子が居たが、僕を驚かせたのは彼女達では無く、同行していたもう一人だった。
かってＤ　ｏｆ　Ｄ決勝で戦い僕と美羽さんを庇い死んだはずの男。

「叶翔・・・・・・！！」

「久しぶりだな隠者。それに白浜兼一。」

「叶翔・・・君は・・・」

「まあ、そんなに身構えるなって。俺達が戦う理由は今無い訳だし。」

「そうじゃなくて、何でお前生きてんだよ？」

谷本君が一番聞きたかったことをあっさりと聞く。確かに谷本君の言うとおり翔は他ならぬ僕の目の前で息を引き取った筈なのだから。

「俺も死んだと思ったんだけど、気づいたらボロボロの状態でここにいたんだ。そこをここにいる月と詠に拾ってもらったんだ。」

そう言い二人の女の子の方を指す翔。ん、ちょっと待てよ・・・

「月、詠・・・？じゃあ！！この二人が董卓と賈駆！？」

「ああ。」

「コラ翔！！あんた何喋ってんのよ！！それに恋！！あんた裏切ったの！？」

翔が頷くと二人の女の子の内、眼鏡をかけた女の子がこちらに近づいてきて、恋さんと翔に向かって叫んだ。

「・・・・・・（フルフル）・・・・・・違う。」

その追求に対し、恋さんは首を横に振って否定するが、当然納得するはずもなく、尚も問いただそうとするが、

「違わないわよ！！モガッ！！？」
翔が口を塞ぐことで妨げた。
「大丈夫だ詠。こいつら、というよりも白浜兼一は信用できるから。」
そう言い、翔は口を押さえていた手を離し、改めて僕に向かいあう。
「恋からちょっとは聞いてるかもしれないけど、まず最初に、ここに居る月、董卓が暴君だって言うのは真っ赤な嘘だ。」
「じゃあ何故暴君という噂がここまで広まるのを止めなかったんだ？」
「しょうがないでしょ・・・！白装束の奴等に月の両親が人質に取られてて、身動き取れない状態にあったんだから！」
愛紗さんの問いに答えたのは、思い出したくないことを思い出したという感じの緑髪の眼鏡の女の子だった。
「話を戻すぞ。白装束の連中の正体についてまでは詳しく解らんが、あいつらの目的は天の御遣いをこの洛陽におびき寄せて殺すことだ。」
翔の説明に皆やはり、といった顔になる。
「やはりご主人様が狙われるのは、ご主人様がが天の国から来た人だからでしょうか・・・？」

「いや、それなら兼一だけじゃなく、俺や隠者も狙われる筈だ。特に俺は奴等のすぐ近くに居たわけだし、狙われないわけがねえ。」

確かに翔の言うとおり、白装束の狙いが別の世界から来た人間なら谷本君や翔もターゲットになってもおかしくない。

この二人と僕の違いというと、この二人は気付いたらこの世界にやって来てたということだろうか・・・？

「結局謎が残ってしまいましたね。」

朱里ちゃんが首を捻る。結局白装束については謎のままということか。

と、そういえば洛陽に来てからかなりの時間が既に経過していることに気付いた。このままでは又袁紹さん辺りにクレームをつけられそうだ。

「じゃあ愛紗さん、朱里ちゃん。この二人は僕達の陣営で保護するってことでいいかな？」

「それはかまいませんが、袁紹達には何と説明しますか？」

「それなら大丈夫です。幸い董卓さん達の顔を連合軍の皆さんは知らないので、董卓さんは死んだということにすれば問題ありません。」

「袁紹は馬鹿だからきっとそれで誤魔化せるのだ。」

そう言って、愛紗さん、朱里ちゃん、鈴々ちゃんはこの二人を助けるのに賛成してくれた。だがてっきり愛紗さん辺りに反対されると思ったんだけど。

「何を意外な顔をなされているのです。私にだってご主人様がこういう時何をしようとするかぐらい予想がつきます。」

「お兄ちゃん優しいもんね。」

「しかしご主人様、いくら我々があの二人の存在を隠しても、あの者から情報が洩れてしまうのでは・・・？」

そう言い、谷本君の方を見る愛紗さん。谷本君から曹操さんに情報が情報が洩れることを危惧してのことだろう。確かに、曹操さんや他の諸候にこのことが知られたら反董卓連合軍が反白浜連合軍になりかねないが、おそらく大丈夫だろう。

「大丈夫だよ。きっと谷本君ならこの二人のことは黙っていてくれるだろうから。」

「いや、そんな簡単に言い切るなよ。」

「俺も隠者なら大丈夫だと思うぞ。」

「お前もかよ。」

最初の緊張も幾分か緩み、和んでいると、今まで黙っていた董卓ちゃんが口を開いた。

「・・・どうして・・・ですか？」

董卓ちゃんの声は今にも消えそうなか細いものだった。

「私達を助けるよりも、衆目を集めて処刑した方が得な筈です・・・どうして私達を助けようとするんですか？」

「何言ってるの月！？月は何にも悪くないんだから、そんなこと言わないで！」

「でも、私のせいでたくさんの人が死んだから・・・」

そう言い、涙をこぼす董卓ちゃん、ここに来て張りつめていたものが切れたんだろう。

「それは違うと思うよ。悪いのは君達を脅してた白装束の連中であって、君には非は無いよ。それに直接戦って感じたことだけど、君の兵士達は本気で君を守ろうとしてた。だからどんな形であれ、あの人達は君が死ぬなんてことは望まないと思うよ。少なくとも死ぬことで償うっていうのは違うと思うよ。」

「・・・・・・」

「それと君が訊いたことへの答えだけど、誰もが見て見ぬふりをする悪を倒すというのが僕の信念なんだ。だから何の罪も無い君を見殺しにするような真似はしたくないんだ。」

「ホントにそれだけなの？」

賈駆ちゃんがジト目でこちらを見てくる。さすがに初対面の人間にこんなこと言われても信じられないだろう。

「理由はもう一つあるよ。僕はかってそこにいる翔に命を助けられたんだ。だから翔が君達を助けようとしてるなら、その手助けがし

たいんだ。」

「ホントなの翔？」

「ああ。」

そう言い、驚いた感じの表情で賈駆ちゃんは翔の方を見る。さすがに翔もそこまでは話してなかったみたいだ。

「・・・わかりました。あなたに私の真名を預けます。」

「月！？本気なの！？」

「うん。この人に出会ったのはきっと天命だと思うから。それにこの人の言うように私は償いの方法を探したいから。」

「月がそう言うなら・・・解ったわよ。私もあんたに真名を預けるわ。」

こうして二人とも月、詠という真名を預けてくれた。二人はこのまま白浜軍で保護することになった。

「翔、君はどうするんだ？」

「俺はこっちに来て月達に拾われた時から月に命預けてるんだ。だから月や詠がお前の下に行くなら俺もついて行くさ。」

「そう、ならこれからよろしく頼むよ。」

「あれ、あっさりと受け入れるんだな。もっと警戒されると思った

んだけど。」

「君が言ったんじゃないか。僕達に戦う理由は無いって。」

流水制空圏で翔の心を垣間見たことで、翔がずっと孤独と戦ってきたことを知った。だから今なら解りあえる気がする。

それと後から知ったことだが、ＤｏｆＤの決勝の後、国連軍の人達から古代パンクラチオンチームが無事に島から脱出したことを聞いた。だから、もう翔と戦う理由は何一つ無い。

その後連合軍に洛陽の制圧を任せ、董卓の乱は完全に終結した。

余談だが、この後魏の陣営に帰ろうとする谷本君を翔が引き留めようと漫才のようなやり取りをしていて、何か新鮮だった。

ＢＡＴＴＬＥ１３　鳥と隠者と弟子（後編）（後書き）

賛否両論あるかもしれませんが、翔は仲間にすることになりました。
というかこの小説で一番やりたかったのがこの部分なんです。
拠点フェイズをするかどうかは今考えてます。
では感想待ってます。

ＢＡＴＴＬＥ１４　覇王と隠者（前編）（前書き）

今回は夏の番外編です。
時系列はＢＡＴＴＬＥ５の辺りです。

BATTLE14　覇王と隠者（前編）

「どこだここは・・・？」

谷本夏が気付いた時、目の前には荒野が広がっていた。

「あの不良師匠がこんな手の込んだ真似するとは思えないしな。」

どうしてこんな所に居るのかと考え、彼の師父である馬槍月の仕業かと思ったが、彼の性格から考えて、それは無いと判断した。

「携帯も圏外か・・・」

結局良い打開策も浮かばなかったので、とりあえず人里を探すことにした。

1時間程歩いた夏の目にようやく人里らしきものが見えて来たが、どうにも様子がおかしい。目を凝らせば煙が至る所から上がっているのが見える。

嫌な予感がした夏は急いで向かうことにした。

駆け付けた夏が目にしたのは、あちこちから火の手が上がり、現在進行形で村を襲っている黄色の布を頭に巻いた男達だった。
村の惨状にも驚いたが、それよりも夏が驚いたのは村人の服装や家屋だ。見た感じからここが中国のどこかだと推理できるが、あまりにも古すぎるのである。ド田舎だとかそんな言葉で片付けられるレベルじゃない。
と、ここで夏の思考は中断させられる。夏の視界に村人とおぼしき少女を襲おうとする黄色い布を巻いた男の姿が写った瞬間、夏は考えるよりも先に動いた。

「頂肘鬼哭烏龍盤打！！！」

夏は肘打ち二発を相手に叩きこみ、天王托塔で相手を打ち上げ、トドメと言わんばかりに烏龍盤打を決める。
そのまま村人達を庇うように前に出る夏。
普段兼一達に悪態はついてはいても、夏はこの状況を見過ごせるような人間ではなかった。

敵は素人が武器を持った程度の連中だったのと、少数だったため、割と早く片付いた。
そして夏は少しでも自分が置かれている状況を把握するために今しがた助けた村人から話を聞くことにした。

ＢＡＴＴＬＥ１４　覇王と隠者（前編）（後書き）

区切りを良くするために前後篇に分けます。
後編は数日中に投下します。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1298o/

史上最強の恋姫

2011年12月30日01時45分発行